

---

# 銀魂 - 私と桜と真選組！ -

李

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀魂 - 私と桜と真選組！ -

### 【Nコード】

N9992X

### 【作者名】

李

### 【あらすじ】

真選組を訪ねてきた少女、天王寺ルナ（てんのうじ るな）は、近藤や、土方、沖田、そしてその姉ミツバの幼なじみだった。沖田たちも知らないルナの過去に万事屋、坂田銀時も関係していた

！？シリアスあり、ギャグあり、恋あり、桜とともに成長する少女の生き様、ご覧あれ！

## 第零話 プロローグ（前書き）

初めまして！李といます。

この小説は、銀魂にオリキャラを投入したお話です。どちらかというと、真選組メインになってます！けど、万事屋も出てきます^^  
駄文かもしれませんが、どうかお付き合いください><

それでは、「銀魂 - 私と桜と真選組！ -」始まりです！

## 第零話 プロローグ

「ねえ、るーちゃん。」

「なあに？」

「僕ね。大きくなったらもつと強くなって、るーちゃんを守る！」

「本当？じゃあ、ずっと一緒にいてくれるー？」

「うんっ！大きくなったら、あいつも倒して、四人で暮らすんだ！」

「えー？みんなで暮らしましょうよ！……でも、本当に一緒にいてくれる？」

「本当だよ。じゃあ約束しよう！」

「うん！」。

二人でわらいながら、指きりをした。

私は今でも覚えてる。

あなたは覚えていますか？

私と過ごした日々のこと。あの時のこと。約束。

会いたい。あの人に、あなたに。

**第一話 私と再会とバスーカ（前書き）**

本格的に話を進めて行きたいと思います！

あの人達が出てきます><

## 第一話 私と再会とバズーカ

「どこだっけ……?」

まだ日が昇り始めてまもない早朝。人気の少ない道を、フラフラと歩く少女が一人。栗色の髪を左側で高く結び、瑠璃色の瞳をした少女。路地に入っては出て、右の道へ行っては戻り、左の道へいったりと……どこからどう見ても迷っていた。

「あれ。ここか。」

ようやく少女は、一つの建物 真選組屯所の前で立ち止まった。門の目の前まで歩いて行くと手で、門を軽くたたく。

「すみませーん! 誰かいませんか? ってか、開けて下さーい!」

早朝にもかかわらず大声を張り上げる少女だったが、誰も出てこないどころか、返事すら聞こえない。

「あれ……誰もいないのか ドオオオオオン!

その直後、少女の目の前から門は消えた。門の代わりに煙が立ちのぼり、やがてその中から人影が現れた。

「オイ総悟! お前何やってんだ! 門壊れちまったじゃねえか!」

中から現れたのは黒髪無造作ヘアに鋭い目つきの男 真選組副長土方十四郎だった。そして、また別の影が現れる。

「あーあ。こりゃまた派手にやっちゃいましたねィ。土方さん。」

次に現れたのは肩にバズーカを担いだ、亜麻色の髪に蘇芳色の目の真選組一番隊隊長沖田総悟。涼しい顔をしていたが、肩に担いだバズーカからは、煙が上がっていた。

「何俺のせいにしてるんだよ！テメーがやったんだろ！？」

「いや、俺は土方さんに向けて打ったんですぜ。土方さんに当たれば門は壊れなかったじゃないですか。」

「ふざけてんのかテメエ！」

土方が刀を取り出し、まだ涼しい顔をしている沖田に向ける。そして沖田も再びバズーカを構える。そんな中、少女は二人を見ながら目を輝かせていた。

「だいたいな、お前まだ……」

「十四郎さん！そーちゃんっ！」

今まで黙っていた少女が急に弾むように言ったので二人は少女の方を向く。二人はケンカをやめ、少女の方をじっと見つめる。

「ルナ………？」

「うんっ！」



少女

天王寺ルナは笑顔でうなずいた。  
てんのうじ

## 第一話 私と再会とバスーカ（後書き）

読んで下さり、ありがとうございます！

さあーこれからどうするかな……；

## 第二話 私とジミーと屯所探検

ルナは、嬉しそうに微笑みながら二人と一緒に屯所内を歩いていた。

「マジかよ……お前、本当にルナか？」

「何度も言ってるじゃん。ルナだよ。ルナ！……もしかして、私の事、忘れちゃった……？」

「んな事あねえけどよ……！」

「まあそんな事いいじゃないですか。久しぶりの再会なんですぜ？  
るーちゃんとは。」

この少女ルナは、真選組結成前 土方達がまだ武州にいた頃の知り合いであった。なぜ、久しぶりなのか、それは土方達が江戸に上京した後、親戚に引き取られたからであった。

「そーちゃん、近藤さんは元気？」

「元気ですぜ。元気すぎて、逮捕されそうになるくらいでイ」

「そっか、風邪とかで寝込んだ事ないもんね！そーちゃんは？ちゃんとご飯食べてる？」

「もちろんでさあ」

どっかの母親が言いそうなセリフだな、と土方が呆れているなか、沖田は嬉しそうにルナと話を続ける。

「あっちの方、土方さんの部屋なんでムシャクシャしたらあっちに向けて、バズーカ打つとストレス発散できるから、ルナもやってみたら……」

「するんじゃないねえ！」

「そーちゃんは変わらないね〜」

「それから、あっちの池には鯉がいるんでイラついたら石投げ……」

「オメーはどこでストレス発散してんだよ！道理で鯉が少なくなっただと思っただ！近藤さん泣いてたもん！」

沖田に、屯所内を説明されながら、きよろきよろと周りを見回すルナの目にふとバトミントンのラケットを持った土方達とは少し違う隊服を着た男が映った。男は、ルナ達に気付くと軽く会釈をして、近付いて来た。

「副長、隊長、おはようございます！えっと……そちらの方は……？」

「あ、初めまして。天王寺ルナといます。」

「こちらこそ始めまして。真選組監察の山崎退です。」

ルナが頭を下げ、山崎も頭を下げる。

「言っておくが山崎。るーちゃんは、武州にいた頃からの幼なじみでイ。ふざけたマネしやがったら、どうなるかわかってんだろぅな

「？」

「ハイハイ。何もしませんって！……でも、へえ〜武州に居た頃からの……ってえええええ！？幼なじみ！？って事はミツ……」

言葉の続きを喋ろうとした山崎は、隣にいた沖田のただならぬ殺気を感じ、息をのんだ。

「どうしたんです？山崎<sup>ジミー</sup>さん」

「何でも……ってあれ？今、地味って言った？ジミーって言った？俺、地味って言っただけ！？」

「普通わかるだろ。お前が地味な事くらい。」

「そうですね〜ジミーさんが近づいて来なかったら、私わかりませんでしたもん。」

「副長！？ルナさん！？酷すぎでしょ！普通わかるとか、ルナさんに至っては初対面だよな？さっきまで山崎と書いてジミーだったのに、もうそのまんまジミーさんじゃん！」

そんななか、楽しそうに笑っているルナを悲しそうな目で見つめている人物　沖田がいた。悲しそうと言うよりは、心配そうな、そわそわとした様子で……。

そんな沖田を、土方は見逃さなかった。

## 第二話 私とジミーと屯所探検（後書き）

局長さしおいて先に出ちゃったよザキ…^^：

次は出てくるかな…近藤さん；

### 第三話 私とゴリラと信頼できる人たち（前書き）

本日は、銀魂42巻発売日ですね^^！

表紙は、今井信女ちゃんと佐々木異三郎さんだそうです！

ジャンプで読んでた時にも二人が出てくる話の土方さんがカッコ良  
くって…！

二人もカッコ良かったです！買いに行かなければ！

今回の話は、前回先を越されてしまったゴリ…局長がです！

### 第三話 私とゴリラと信頼できる人たち

局長室。襖の前に立ち、近藤さん入るぞ、と声をかけると、ああ、と声が返って来た。襖を開ける。土方が入るのに続いて沖田も部屋に入った。

「おお。トシと総悟か。どうしたんだ？」

座布団にどっかりと座り、二カつと白い歯を見せて笑うゴリラが…ではなくこの男、真選組局長、近藤勲である。仕事をしてきたのか、机には写真やら資料やらが置いてあった。

「近藤さん。客人でさア。るーちゃん、こっちこっち。」

「近藤さんっ！お久しぶりです！」

沖田に手招きされ、ルナは、近藤の前に立ち深々と頭を下げる。近藤は、驚いた顔をしていたが、おお！と声をあげた。

「ルナか！久しぶりだな〜！何年ぶりだったかな、大きくなったなあ。」

「近藤さんもよりゴリ…いや、男前になっちゃって〜」

気のせいか、涙目になっている近藤がルナを見上げて笑う。ルナも苦笑いした。



「どうしたんだ？急にこんな所に来て……」

「それは、その……」

「？」

近藤に尋ねられて、言いくそげに口ごもるルナを見て、土方が口を開く。

「近藤さん、ルナについてお互いに聞きたい事もあるだろう。少し話さないか？」

「ああ。いいぞ。」

土方が真剣な顔をして言ったので、沖田や、近藤もきちんと向き合う。

数秒の沈黙が流れた後、初めに口を開いたのは土方だった。

「まずルナ。お前は、親戚に引き取られたはずだったよな？」

「ハイ。」

「…じゃあ、今までどこに居たんだ？あと、なんでここに来た？」

「どこって……親戚の家に居たんですよ。それに、会いたかったからここに來たんです。」

「なんで、刀を持っている？」

「この刀は、昔も今も肌身離さず持つてるだけですよ。」

また、沈黙が流れる。土方は、ため息をついた。

「ウソだな。」

土方はキツパリと言う。近藤や沖田も、お見通しとでも言うように、大きく頷いた。

「あはは…やっぱり、ばれちゃったか…！」

「ばれちゃったじゃねえよ。俺達みたいな仲で、ウソをつく必要なんて無いだろ？」

土方に言われ、ルナは、俯く。

「何ですかイ…？何でウソなんてついたんでイ、ルナ。」

「今更、驚く事なんざねえよ。知り合いに引き取られたお前が、こんな所に来た時点で驚いてんだからよ。」

「そつだぞ。言にくいことでもなんでも、俺たちは気にしないぞ。」

「

まるでルナの言いたいことがわかっていている様に優しく声をかける。

「ごめんね。やっぱり、みんなには敵わないね。」

言わなきゃ……。

「隠してるとかそんなつもりは無かったんだけど……あのね。」

不安そうな顔をしたが、やがて決意を決めたように口を開いた。

「私は……………」

「鬼兵隊に居たの……!」



第三話 私とゴリラと信頼できる人たち（後書き）

## 第四話 私と鬼ごっここと真選組入隊

「私、鬼兵隊にいたの……………！」

「ええええええええええ！？」

数秒の沈黙が流れた後、大声で叫んだのは、……………山崎であった。

「……………？」

「オイ山崎イ……………！盗み聞きとは良い度胸じゃねえか！お前らいつからそこにいたア！」

襖から顔を覗かせていた山崎を土方が睨みつけ、立ち上がる。それと同時に、部屋の襖がバツと開き、顔を青ざめた数人の隊士が部屋になだれ込んだ。

山崎は、先頭に立ち、土方に向かい土下座する。

「すみません！副長！盗み聞きって訳じゃないんですー！こいつらが、局長室に美少女が入ってったって言うから、説明してたら聞こえてしまっただけ！」

「おっおい！山崎！俺達のせいにするなよ！」

「てめえら全員、土道不覚悟で切腹だアアア！！！！」

「ぎゃああああ！」

「これが本当の鬼ごっこだアアア！」

刀を取り出し、隊士を追いかけ始めた土方を近藤達三人は呆れたように見る。

「あの……私っ……」

土方を見ていた近藤と沖田に、ルナがおずおずと話しかける。

「鬼兵隊に居たって……どういう意味なんで？ーちゃん。」

「その……面倒見てもらってたっていつか……」

「面倒見てもらってたって……」

「山崎イ！まずはお前からだアアアア！」

「ギヤアアア！」

ドオオオオン！！

「土方死ねやアアア！！！！」

「総悟オ！！テメエは黙ってるオオ！」

先ほどまでルナの隣に居た沖田もいつのまにか鬼ごっこに加わり、何の話をしていたのかすらわからなくなってしまうっていた。

聞かれないのならできるだけ、言いたくない…そう思っていたルナは、安心した。

武州に居た時も、今もちつとも変わらない…。騒がしいけど温かくて…羨ましい。

あの人も…変わってない。

ルナが土方や沖田をボーッと眺めていると近藤が声をかけてきた。

「なあ、ルナ。」

「はい？」

「言いくいなら無理に言わなくていい。落ち着いたらまたゆっくり教えてくれ。」

「……はい。」

「それはそうと ……真選組に入らないか？」

「え？」



「嫌か？」

「いや…嫌…じゃないんですけど、どついつ意味…」

「ならいいよな！」

「だから…」

意味がわかりません、と言おうとしたルナを無視し、近藤は続ける。

「みんな注目ー！ー！ー！」

近藤の声に鬼ごっこをしていた土方や沖田も振り返る。

まさか……

「新人隊士が入ったぞ　！！！！名前は…天王寺ルナちゃん！女隊士だ！！！！」

「マジっスカー！局長ー！」

ええええええええええ！？

ルナの嫌な予感は的中した。

#### 第四話 私と鬼ごっこと真選組入隊（後書き）

なんか、重要な所で話がずれているような……；  
申し訳ありません；

一応これでルナも真選組隊士ですね！（

感想や評価をくださると嬉しいです>><

**第五話 私と出会いと枝垂れ桜(前書き)**

回想シーン(?)入ります!

一話で終わりますのでお付き合いください^^

## 第五話 私と出会いと枝垂れ桜

数年前

自分が何者なのかわからなかった。人間なのか。天人なのか。

自分のことは何も知らない。目覚めてあったものは、刀と「天王寺ルナ」と書かれた一枚の紙切れだけ。

何をすればいいのか、どこに行けばいいのか……何もわからないまま気がつけば私は、刀を振っていた。

今日もまた、刀を持った男とやりあった。だけど、ここ数日の疲労のせいか、意識は途絶えた。

最後に見たのは、満開の枝垂れ桜だった……

武州は春の暖かい陽気に包まれていた。

見渡す限り田畑ばかりの道を、歩いている男が三人。

「近藤さん、まだ着かないんですか？」

まだ十歳ぐらいの少年が、大柄な男に話しかける。

「ああ、もう少しで着くさ。」

「少ししか歩いてねえのにもうこれか。」

その隣にいた黒髪の男も話に入る。  
すると、少年は男を睨みつけた。

「まだ行けるもん！」

「だが、もう大分歩いているからなあ…よし！じゃあ、あの桜の木で休憩な！」

大柄な男、近藤が少し進んだ所にある桜の木を指差すと、沖田は目を輝かせた。

「じゃあ競争しよう！」

「望むとこじゃねえか！」

「待てよー！総悟！トシ！」

桜の木目指して駆けて行った沖田と土方を近藤が追う。

「やった〜！いっちばーん！」

桜の木に着くなり、三人は座り休憩する。

少し休むと沖田は立ち上がり、桜の周りをウロウロし始めた。

「あっ！」

「どうした？総悟。」

沖田がいきなり声をあげたので、土方や近藤も沖田の方を振り向く。

「この子…!」

この子　　沖田が指差す先にいたのは栗色の髪を持つ少女だった。

歳は沖田と同じくらいだろうか。

気絶していたが、所々怪我をしており腰には刀をさしている。着ていた着物もボロボロで少女のものか、別の誰かのものか、血も付いていた。

「ひでえ怪我だな……」

「トシ！手当てするぞー!」

近藤と土方は少女の手当てを始めた。沖田はその様子を心配そうに見る。

…誰…？

少女が意識を取り戻した頃には、手当ても終わっていた。

「あの……助けてくれたんですね。ありがとうございます。」

「いやあ、良かったよ。血まみれで倒れていたもんだったから……」

「……」

人と話すなんて何年ぶりだろうか。何を話せばいいのか…。

「何処から来たの？」

「わからない……」

ふと、今まで黙っていた沖田が少女に話しかけた。

「いきなり聞くんじゃないよ。困ってんだろ？」

「わかってらあ！ねっ、じゃあ名前は？」

「名前……えっと……天王寺……ルナ……。天王寺ルナ。」

「僕は、沖田総悟っていうんだ。よろしくね、るーちゃん！あと、こっちが近藤さんで……こっちが……マヨ方！」

「誰がマヨ方だ！」

「る……ちゃん……？」

「うんっ！ルナだからるーちゃん。あのさっ……僕と友達になつてよ！」

「友達……？」

目を輝かせながら話しかけてくる沖田に、ルナは正直戸惑っていた。友達なんて初めてだし、そもそも人とこんなに話すことも無かった。

「ねっ近藤さん、ルナと遊んでいいですよね！」



「まあいいが……ルナちゃんは手当てしたばかりだから程々にな」

「はい。行こつるーちゃん！」

「あつ……うん」

まだ少し戸惑ってはいたが、沖田に手をひかれ歩いて行く。桜の木の下にいるのは近藤と土方だけになった。

「いいのか？近藤さん」

「ああ、見たところ、あの子一人っばいしな。」

「刀持つてる時点でおかしいもんな。………つたく総悟の奴……」

「いいじゃないか。でも、総悟が自分から話しかけるなんて珍しいよな……」

気がつけば、ルナと沖田はすっかり打ち解けており、笑顔で走り回っていた。

「同い年ぐらいだからかなあ」

「どうするんだ？」

「どう……って、あの子、帰る場所も行くあてもなさそうだしな……よし！うちの道場に来てもらうか！」

「とんでもねえお人よしだ……この人。」

……これが私たちの出会いだった。

何者だかわからない私を受け入れてくれたみんなとの出会い。

あの満開の枝垂れ桜は今でも私の目に焼き付いている。

## 第五話 私と出会いと枝垂れ桜（後書き）

枝垂れ桜って綺麗ですよ。

画像とか探してみるとすごい綺麗なものが見られますよ！

次回からはまた四話の続きに戻ります！

第六話 私と満月と真月光（前書き）

とりあえず入隊篇はこれで完結です！

さあ、ルナ！しっかりやっておくれよ！お願いだから！

## 第六話 私と満月と真月光

「初の女隊士、ルナちゃんの入隊にカンパーイ!!」

屯所内から聞こえてくる賑やかな声。豪快な男の笑い声や、酒を注ぐ音、バズーカの音…は気のせいだろう。

「局長！ついにやりましたね！男だらけの暑苦しい屯所にオアシスがあああつ」

「さあ！今日は入隊記念パーティーだ！飲め飲めー！」

…結局入隊することになってしまった…！

近藤の無茶苦茶な発言のため、断りづらくなってしまったこともあり、ルナは真選組に入隊することになったのだった。一応、自分の意見も言っただつもりだったが……

「まあいいじゃねえですか。ハイハイ、るーちゃん。」

「ま、お酒は飲むけどさ……」

沖田に酒を注がれ、ルナも飲み始める。

「あれ、ルナさんいくつ何です？」

「18。」

「ええっ？未成年じゃないですか！」

「まあまあ、細かいことは気にしない〜！結構いけるんですよ？私」  
「酒を飲み干しながらニコニコと答えながら、沖田とどンドン酒を空けていった。」

「ところで近藤さん、るーちゃんは何番隊にいくんですか？」

「そうだなあ……」

近藤と沖田がルナの所属する隊をどこにするか考えていると、山崎が疑問をぶつけた。

「あの……失礼なのですが、ルナさん剣術の方は……」

山崎がルナの方を振り向いてみると、ルナは腰に差した刀を取り出し山崎に向けていた。

酒瓶を片手に笑っているルナは

「一手合わせてみる？」

酔っていた。

「もう酔ってるじゃないですか！」

「はっはっは！ザキ、ルナは結構強いぞ〜」

その時、ルナはある一人の人物がいないことに気がついた。そう、土方がその場にいなかったのだ。ちなみに、山崎のように実はその場に居るが気づいていないだけという訳ではない。

隣を見ると近藤が腹踊りを始める勢いで酒瓶を振り回していた。

「私ちょっと風に当たってきますね。」

取りあえずその場から出ようと思ったルナは立ち上がり襖を開け外に出た。

外に出たルナの目に映ったものは、雲一つない夜空には黄金に光る満月だった。

「わあ……」

いつのまにか、土方を探すことなど忘れて、月に見とれて縁側に座ってしまっていた。

綺麗な月だなあ。そういえば、道場に初めて行った夜もこんな満月だったっけ。

ルナは刀を取り出し月光に刃を当てた。

『真月光』……それが、この刀の名前であった。ルナに残されたた

った一つの過去を知るための手掛かりのこの刀は、月光に当てると青白くキラキラと光る。

「ルナ…？何してんだ」

後ろを振り返ると土方がルナの刀を見ながら立っていた。

しばらくボーっと土方を見た後、最初の自分の目的を思い出しあつと声をあげた。

「十四郎さん！今までどこに居たんですか？」

「別に…普通に部屋に居ただけだが？探してたか？」

「あゝいやあ、探そうとしてたんですけど、満月に見とれちゃって

…」

おい…と呆れる土方をよそにあはは…と苦笑いするルナ。

「でも、まさかまたルナと一緒に居れるなんてな。しかも隊士として働くなんて…」

「……はい。鬼兵隊でも刀、振ってたんでね。」

「そっか…」

鬼兵隊で刀を振る、と言うことは攘夷活動をしている鬼兵隊の手伝いをしていたということ。

気まずい空気が二人の間に流れる。



聞かなきゃ。

ずっと聞こうと思っていたことを聞こう…そう決意し、口を開いた。

「ねえ…十四郎さん。あの…ミツバ…さんは…」

「……！」

ルナの思わぬ発言に土方は下を向く。

沖田ミツバ。彼女はムカつく部下の姉、おしとやかで綺麗で優しく、武州の時もルナが本当の姉のように慕っていた人物だった。

……自分もそのミツバに好意を寄せていた。だが、もう彼女は。

話さないといけないことだと、ルナが来たときから思っていたが、自分が言っていていい話なのか。

決断ができなかった土方は黙ってしまった。

「十四郎さん……？」

何で黙っちゃうの？

それは今もミツバさんのことを考えているから？

「ルナーっ！トシーっ！ちょっと来ーい！！」

その時、中から近藤の明るい声が聞こえた。酔っているのか、声が少し裏返っていた。

「あっはーい！」

中に戻ろうと刀を腰に差し立ち上がる。土方の横を通り襖を開けようとすると、

「また……」

ずっと黙っていた土方が口を開いた。進もうとしたルナも足を止める。

「落ち着いたら話す。」

「……ハイ。私もそうします。」

お互いに真実を話せる日が来るまでゆっくり待とう。

一言返し、襖を開けた。そして二人は中へ入って行く。

真つ暗な夜空に浮かぶ満月だけが、その姿を見ていた。



第六話 私と満月と真月光（後書き）

なんか前回から急に長くなってますよね……；

読みにくくないでしょうか？

## 第一話 私と迷子と方向音痴（前書き）

ここからは、ほのぼの系で色々なキャラと絡めていきたいと思いま  
す！

## 第一話 私と迷子と方向音痴

真選組入隊一日目。

……とは言っても、ルナの入隊が決まったあの日からもう二日も経っていた。

昨日、あの日の夜に酔い潰れた隊士たち（近藤たちも含む）が寝込んでしまったために、初仕事は二日後ということになった。なので、昨日は屯所内を見て回った。

まあ仕事と言っても、真選組も警察。大きな事件が無い限り、隊士の半分は毎日がパトロールだ……と、そーちゃんは言っていた。

とりあえず今は、どこに行けばいいのかわからないので近藤の部屋に行こうとしているつもりだった。

……が、

「近藤さんの部屋、どこだっけ……」

まだ屯所内も把握していないルナにとってはそれすらもわからなかった。

「たしか、池の近くの廊下を真っ直ぐ進んだ辺りだったような気がするよな、しないよな……」

その時、見知った顔がやってきたのである。

「あつ山崎さん！！」

「あれ、ルナさん。どうしたんです？」

山崎を捕まえ、道を聞こう。

「局長室ってどこですか？」

「ああ。その角曲がって真っ直ぐ行ったところですよ。パトロールの場所でも聞くんですか？」

「あ、ハイ。そうなんですよ。」

角を曲がり真っ直ぐ…ルナは山崎に礼を言い駆けて行く。

これで真っ直ぐ局長室に行ける…が、ルナの場合そう簡単にいかないのである。

〈数分後〉

「はあ…副長ったら人使い荒いんだから…ってあれ？ルナさん。」

「あ……ザキ。」

なんだか数分間でこの人も人使い荒くなったような……とツツコミたい気持ちを抑えて山崎はルナに問う。

「パトロールの場所、わかりましたか？」

「あゝいやあそれがその……」

言いにくそうに目を逸らす。

「悪いんですけど、局長室ってどこでしたっけ？」

「ああ忘れちゃったんですか？ここからだ……ここ右行って左行っただですよ。」

「あ、ありがとうございます。」

先ほどと同じように礼を言い、駆けて行く。

山崎も駆けて行くルナの姿を見送り歩いて行った。

〈またまた数分後〉

「はあゝ……沖田隊長もサボるのいい加減にしてくれないかなあ……あ、ルナさん。」

「ザキ。」



会う度に扱い酷くなってね？とツッコミたい気持ちを抑えて山崎はルナに問う。

「局長室の場所、わかりましたか？」

「あーっと、あのさ……」

また目を逸らす。

「局長室、どこだっけ。」

「また…ですか？えっと、ここ戻って…あ、あそこですよ。副長の部屋の隣です。」

「ありがとう！」

また礼をし、駆けて行く。

いつの間にかタメ口になってね？と思いながら山崎も歩いて行った。

↳そしてまた数分後↳

「ああ…沖田隊長なんて昼寝してたのに俺って…ってまたルナさん？」

「なんだ、ザキか…」

なんだって何ですか！何だったって！と心の中で叫びながら、山崎はまたルナに問う。

「わかりましたか？」

「あの、言いくいんだけどさあ……」

そしてまた目を逸らす。まさか…と山崎も覚悟する。

「局長室…を探すのが目的なんですけど、そもそも副長室ってどこでしたっけ。」

「マジですかアアア！？昨日、屯所回ったんじゃないんですか!？」

あはは…と苦笑いしながら頭を掻くルナを見て呆れる山崎。

「るーちゃんは相変わらずだね。でもまさか屯所でも迷うとはな…」

「わっ!？沖田隊長！いつから居たんですか!？」

「沖田隊長なんて昼寝してたの…から。山崎、お前後で切腹な。」

「……ハイ。」

後悔しながらも相変わらずってどういふ事ですか、と沖田に聞く。

「るーちゃんは極度の方向音痴なんでさア。どっかの三刀流の剣士並にな。」

「ほっ方向音痴!?!」

「そうなんだ。結構歩いてんのにいつになっても目的地に着かないんだよね〜……」

方向音痴…そう言われれば、今まで何回もルナが道を尋ねて来たのもわかるような気がする。

「屯所内ぐらい覚えてくださいよ……」

呑気に言うルナに呆れながらも納得し、うんうんと頷く。

「じゃ、ルナは俺が案内しとくんで。」

「わーいつ!総悟、お願いしまーす」

そう言い、沖田とルナはその場を去る。

「じゃあね!ザキ!」

笑顔で手を振るルナに山崎もヒラヒラと振り返す。

「覚えておけよ。ザキ！」

黒い笑みを浮かべながら手を振る沖田にも山崎はヒラヒラと振り返す。沖田達の姿が見えなくなるなり山崎の顔はみるみる青ざめた。

そして、最後に一言。

「沖田隊長ーっ！すみませんでしたアアア！！許してください  
！！！！」

山崎の叫び声はいつもよりよく響いた。

## 第一話 私と迷子と方向音痴（後書き）

ルナ、方向音痴でした；

ちなみに一話でも迷子になってます！

あと、今回、ルナの簡単なプロフィールを書いてみました〃^|^  
こんな感じですよ

名前：天王寺ルナ（てんのうじ るな）

性別：女

年齢：18

身長：155cm

容姿：瑠璃色の瞳。栗色の髪にさくら貝の簪をつけている。

刀：『真月光』

好きなもの（こと）：刀、猫、祭りなど

通り名は『碧眼の悪魔』。極度の方向音痴。背が低いことが悩み。  
沖田や土方たちの幼なじみで、江戸に上京し、真選組を立ち上げた  
頃は鬼兵隊に居た。（が、まだ詳しくはわかっていない）  
真選組にやってきて入隊することになる。山崎に対しての扱いがひ  
どい。

…と今までで書けることはこんな感じですよ！また、オリキャラは出  
てくると思うのでまた書きたいと思います。

御観覧ありがとうございました！

## 第二話 私と桜と笑顔

ドオオオオン！

早朝。ルナは爽やかな鳥のさえずりで目を覚ます……なんて理想の目覚め方ができるわけもなく、もはや日課となったバズーカの音により目覚めた。

そして枕元にある目覚まし時計をじっと見つめる。

4：52分。

立ち上がりバツと勢いよく襖を開け、息を吸い込む。

「総悟ーっ！今何時だと思ってるのー！！！」

バズーカの犯人であろう人物の名を叫び、探そうと歩き出そうとした瞬間、廊下を駆けてくる人影を発見し足を止める。

「ルナ！」

そこへ犯人が自らやってきたのだ。

「あのさ、今何時だ……」

「はいはい。寝起き悪いのは相変わらずだな。」



「いやだつていつもより一時間くらい早く起きたんだよ!?!しかもこんなに寒いのに…」

不機嫌そうな顔をするルナの肩には毛布がかかっている。

「まあ、とりあえず来てくだせエ。」

沖田はそう言つてルナの手をつかみ走り出す。まだブツブツと文句を言うルナも眠い目をこすりながら手を引かれ、ついていく。

少しして、二人は縁側のところで立ち止まった。

「おはようルナ。」

「おはようございます……」

その場には、近藤と土方。よく見ると二人とも隊服に着替えている。

「朝早くわりイ。見てもらいたいものがあつてな。」

土方に言われ、しぶしぶ頷く。どこかに行くのかと思つたが、どうやら用があるのは縁側らしく、近藤たちは襖を開けると靴を履き外に出て行った。

襖を開けると、ひゅうと冷たい風が入り込んくる。

「どつしたんですか?」

縁側を出た先にある庭の真ん中で立ち止まると、近藤の足元にある何かを指差した。

「これだ！」

よく見てみると、それは植物の苗であった。まだ葉が八枚ほどしか付いていなかったが、枝は真っ直ぐと伸びている。

「何の苗なんですか？」

ルナが尋ねると沖田が答えた。

「桜。枝垂れ桜でさア」

「出会いの木。」

土方がポツリと言う。

枝垂れ桜。出会いの木。私たちが初めてあったのも枝垂れ桜の下だったことを思い出しあつと言う。

「ルナが真選組に入ったことでまた新しい何かが始まるだろう。だからこの木は始まりの木だ！来年の春には咲くといいな！」

「真選組は大変だし、忙しいと思うが…この桜が咲くころにはもうルナも慣れてるだろうな。」

私のために植えてくれた。そう思っただけで嬉しさがこみ上げてきた。

「ありがとうございます！私、頑張りますね！」

その瞬間、ふわりと笑うルナの笑顔に沖田は大好きな姉の姿を重ねた。

武州に居た時に毎日のように見ていた姉の笑顔とルナの笑顔が似ていたのだ。ちゃんと世話しますね、などと近藤と話している姿をボロッと見ていたら、土方がこちらを見ていることに気がついた。

「…何見てんですか」

「別にお前じゃねーよ」

「じゃあルナですか。」

「似たな……」

ふと土方が言ったのでまたルナの方を見る。

「誰に。」

とぼけてみたが、土方には「気づいてるだろ」と見抜かれてしまった。

「この前、聞かれたよ。ルナに。」

沖田の方を見てみると、驚きを隠せていないようであった。

何の話か、なんて言われなくても分かっていた。  
ミツバの話である。沖田も土方同様、いつ聞かれるかと思っていたから。

「なんて……なんて言ったんですかい」

「黙っちまった。その後近藤さんに呼ばれてそれ以上は話さなかったけどな。」

土方は自分が言っていない話なのか迷っていたを思い出す。

「総悟、お前はどっ思う。」

沖田は黙り込んでしまったが、土方は続ける。

「ルナがあいつが……ミツバはもういないと知った時」

「俺が言います。」

それだけ言い、沖田はその場を立ち去ろうとした。気がつけば、もうルナや近藤は中に入っていた。

土方さん。あんたはわかつちゃいねエんだ。ルナの気持ちを

……

立ち去る沖田の姿を黙って見ていた土方は先ほど三人で植えた桜を見る。

「つたく……」

真っ直ぐに立った桜だけが、全てを見ていた。

第二話 私と桜と笑顔（後書き）

まだ万事屋が出てきませんね……；

早く銀さんや神楽に出てもらいたいです><

あ、新八もねっ！

### 第三話 私と副隊長と万事屋さん（前書き）

ルナ「ちよつと！今って家出少年篇よね？」

そうですが……？

ルナ「どの辺が？」

すみません！もう少しで家出少年篇は始まります！

今は「まあ、お茶でも飲んでゆつくりしましょう篇」です…あれ？  
るーちゃん！？何バズーカなんて取り出してるの！？いつからそんな危ない子になったの！？早まらないd『ドオオオオン！』

ルナ「作者は不在ですが九話をどうぞ！」

### 第三話 私と副隊長と万事屋さん

「一番隊副隊長？」

「ああ。」

局長室。そこには机をはさみ、真選組トップ3とルナが座っている。ルナの所属する隊が決まったたのことでここへ呼ばれた。

「一番隊ってことはそーちゃんのとこの副隊長ですか？」

「そうだ！一番隊は、特攻隊だがルナの強さなら大丈夫だろうと思っ  
つてな。」

近藤はそう言うが、実はルナの一番隊への所属は仕事を真面目にやらない沖田を手伝ってもらったためでもあった。

「ってことだが、頼んでもいいか？」

「ハイ！喜んで！」

ルナがにっこりと微笑み、土方も安心したように頷く。

「じゃあ、今日は巡回も兼ねて色々と回ってくるといい。それから  
これ、隊服な。」

「ありがとうございます！」

実は、思いっきり観光をしようとしているルナである。



「ゴメンな、るーちゃん。本当は案内したいんだが、土方コノヤロ  
ーが仕事しろっつーから……」

「当たり前だろ！いくらルナが入ったからってお前が隊長なのは変  
わらねーからな。」

「いいよ。仕事、頑張ってね。」

申し訳なさそうに言う沖田であったが、ルナの耳元でこっそりと

「真面目に仕事するきなんてこれっぽっちもねえんで。後で行きま  
さあ。」

と言い、小さな紙切れを渡してくれた。

「じゃあ、いってきまーす！」

く  
＊く＊く＊く＊く＊く＊く＊く＊く＊く＊く＊く＊  
く  
＊く＊く＊

美少女が真選組の隊服を着ているからか、周りからはじろじろとよ  
く見られたが、ルナはそんなこと気にもせず探検していた。

沖田にもらった紙切れには、地図が書いてある。

おもしろい所を教えてほしい、とルナに頼まれ書いたものである。

『真選組屯所』と書かれた場所から目印になっている建物などを書いてあり、歩いてみても地図そのままの建物が書いてあった。

ルナは、そこに書いてある建物を片っ端からまわった。完全に巡回など忘れて、シヨツピング気分である。

だが、一つ気になる建物の名前が書いてあったのだ。

『万事屋』。

行ってみよう、とそこへ向かって歩き出した。

『万事屋』は近く、数分歩いた先にあった。

「ここ…だよな？」

（そーちゃんがおもしろいって言うから来たけど…）

二階建ての建物。一階には「スナックお登勢」二階には「万事屋銀ちゃん」という看板がついている。しばらくその場で立っていると、一階の建物から人が出てきた。

「おや、どうしたんだい。用があるのは上かねえ？」

中から出てきたお婆さん…と言ってもいい年齢（であろう）の怪物

…いや女性はルナに訪ねてきた。

「あ、はい。えっとお婆さ…いや、お婆さんは下の…？」

「お婆さんとは失礼だね。これでも昔はこの町のアイドルだったんだよ！」

(一応気を使つたつもりだったんだけどな…)

苦笑いしながらそうですか、と返事をする。

「万事屋うへに用があるならその階段を上がっていきな。」

「ありがとうございます。」

親切に、階段を指差し教えてくれたので言われるまま階段を上がっていった。

って言うか…万事屋って何？

ここへ来てそんな疑問を抱えながら戸を叩く。

「すみませーん！『ばんじや』ってここですかア！」

すると、戸がガラツと開き、銀色の天然パーマに死んだ魚の目をした男が現れた。

「ゴメンな讓ちゃん。ここ『ばんじや』じゃなくて『よろずや』だわ。そんじや」

それだけ言うとまた戸を閉めようとした。が、そこへ中から眼鏡をかけた少年と、チャイナ服を着た少女がバタバタと駆けてきた。

「何やってるんですか銀さん！お客さんじゃないですか！何返そうとしてるんですか！」

「そうネ！ここ最近仕事なくて糖分とってないから頭くるっちゃったアルか！」

「そうだ。久しぶりのお客様だなア。どうも、万事屋です！」

「新ハイ！！どうするアルか！銀ちゃん完全におかしくなっちゃったネ」

「そんなこと言ったって神楽ちゃん！」

「甘いもの…甘いものをくれエエエ！…！」

叫ぶ天パ男の肩を眼鏡少年とチャイナ娘が揺する。呆然として見ていたルナだったが、何となく話を聞いている限りで理解したことを実行しようと思ひ、隊服のポケットの中を探る。

あつたアアア！！！！

ポケットの中から取り出したものは小さな紙切れがついた饅頭だった。

(えっ！？マジで！？何これ！絶対無いと思つてたのに！)

紙切れには文字が書いてあつたので読んでみる。そこには見たことのある字で

『これ、旦那にあつたら渡しといてください。』

沖田  
『

……と

ルナはその饅頭をまだギヤーギヤーやっている三人に差しだす。

「あの……これ……どうぞ。」

この後、ルナが三人に大歓迎されたのは言うまでもない。

### 第三話 私と副隊長と万事屋さん（後書き）

本当すみません！あと一話だけなんで！

あと一話終われば家出少年篇始まります！

**第四話 私と饅頭と万事屋さん？（前書き）**

最初に言っておきます。

ルナにはあんなこと言わせてますが作者、神楽ちゃん大好きです！  
（誕生日はしっかりお祝いしました！）



#### 第四話 私と饅頭と万事屋さん？

「いやぁ本当にどうもありがとうございます！」

「いえいえ、知り合いに渡せと言われていたものですから…」

何故ここに来たのかの一連を話した後、万事屋に上がったルナは机を挟み三人と話をしていた。

「このままじゃホント万事屋ばんじやになるところだったアル！」

さつきからずっと同じようなこと言っていない？という疑問を抱えながらも「お役に立てて良かったです」と笑顔で答えていた。

「改めまして、万事屋のオーナー坂田銀時さかたぎんときだ。こっちは従業員で、ダ眼鏡の方が新八しんぱち、チャイナ服の方が神楽かぐら。」

「ダ眼鏡って言うな！」

軽い自己紹介を終えてじゃあ、とルナの方も自己紹介をしようとする、新八が疑問をぶつけてきた。

「気になってたんですけど、その服……真選組の隊服ですよね？」

隊服について指摘され、はい、と頷く。なぜ女が着ているのか。

真選組の女隊士はルナが初めてなので、ルナを知らない人が不思議に思うのは当然だろう。

「先日、真選組の一番隊副隊長を命じられまして、真選組隊士になりました！」

真選組は武装警察。周りからどう思われているのかわからないので、真選組を名乗るのに少し緊張したが、意外とあっさりと…

「へえ…副隊長ね…」

「って副隊長!?!」

……受け入れられたわけでは無さそうだ。

取りあえず自己紹介をしようと名乗る。

「はい！天王寺ルナと言います。」

名前を言った時に、銀時が一瞬目を見開いたが、ルナは気づかなかった。新八たちも気づいていないようである。

「近藤さんたちとは武州の頃からの付き合いで、先日久しぶりに会い、入ってほしいと言われたんです。」

「そっか。じゃあ、これからよろしくお願いしますね。」

「……？」

巡回などで会って世話になる、という意味でのあいさつとも受け取れるが、これから何度か世話になる、というような言い方だったので不思議に思い尋ねてみる。

「僕たち万事屋は真選組のみなさんと腐れ縁みたいな仲でね。仲が言いわけじゃないんで、会う度に喧嘩ばかりだけど、よくお世話になるんですよ。」

「ホント、どこ行っても会っちゃうんだよな……。」

勘弁してくれよな、と呆れる銀時。ルナは腐れ縁だから総悟がここを知っているんだ、と納得していると神楽が話しかけてきた。

「サドの仲間アルか……。道理で税金泥棒臭いと思ったアル！」

「税金泥棒臭いって何ですか！ってというか税金泥棒じゃないし！」

「銀ちゃんを助けてくれたことには感謝するけど、このヒロイン神楽ちゃんを差し置いて一話から出るなんて生意気アル！私たちがど  
んだけ出番待ってたかわかってるアルか!？」

「しょうがないじゃない！ここじゃあたしが主役なんです！」

神楽とルナがバチバチとメンチを切り合う。どうやらこの二人の相性は悪いらしい。

「お前とは気が合いそうにないネ！表でるヨロシ！決着つけるぞコ  
ラアア!!!」

「上等じゃない！」

お互いに睨み合いながら立ち上がり、外に出て行くこうとするルナと神楽の前に新八が止めようと立ち塞がる。

「何やってんですか二人とも！ちょっと銀さんも止めてくださいよ  
！」

「ああ……別に……いいんじゃないね？」

気だるそうに言う銀時の方を見ると、片手にジャンプを持っている。  
そんな銀時<sup>オーナー</sup>に新八は肩を落とした。

バタバタと戸に向かって駆けて行くルナと神楽。その瞬間、ガラッと戸が開き、見慣れた人物がひよっこりと顔を出した。

「あり。るーちゃん。何やってんでイ？」

「まったく…何で俺までこんなとこに来なくちゃいけねーんだよ…」

そこにいたのは沖田と土方。ルナと神楽は足を止める。

「サド、どくヨロシ！私は今この饅頭女と決着つけるところアル！」

「誰が饅頭女よ！」

が、言い争いはまだ続く。そこへリビングから新八が顔を出した。

「あれ。どうしたんですか？二人揃って…」

「騒がしいと思って来てみれば…沖田君に大串君じゃねーか。」

ルナと神楽の言い争いを横目で見ながら銀時も姿を現した。

「誰が大串だ！それより何でルナがこんなとこにいったよ。」

「ルナは俺達の命の恩人なんですっ！それより何でお前らが万事屋うち

に来てんだよ！」

「ルナ迎えに来たんだよ！それより実はお前らがルナ引きこんだんじゃないねえのか！？」

「違っつってんだろ。それより何で……」

「いい加減にしろ！あんたら何回答えて質問するの繰り返してんだよ！」

新八のツツコミにより銀時と土方は言いあいをやめたが、そこへ沖田が入る。

「あ、旦那のそこ行けって言ったのは俺ですぜ」

「お前なのかよ！」

また喧嘩はスタートし、肩を落とす新八。また隣を見れば女子二人が…

「この小説の真のヒロインは私アル！今はお前でもそんなの『あっ』なんていつ前に終わるアル！」

「何言ってるの！このヒロインは私なの！！」

「こんな、いつもポケットに饅頭持っているやつにヒロインが務まるはずがないネ！」

「いつもなんて持ってないわよ！」

万事屋の玄関は急に騒がしくなった。右にはルナと神楽。左には銀時と土方、それに沖田も乱入している。

…取り残された新八は、呆れながらも「このままではダメだ……」  
と思いを吸い込む。

「お前らいい加減㇏『黙れやダ眼鏡工工エエ！！！！』」

大声で叫んだ新八の声は神楽とルナのアップーによりかき消された。床に倒れこんだ新八は薄れていく意識の中で、こんなことを思っていた。

ルナさんが来て、ますます大変になりそうだな……。

新八の思いは誰にも届かずに終わったのであった。

くその頃く

「トシく…総悟く…ルナく…俺も連れてってほしかった…」

「局長。何やってんですか…」

部屋でいじけている近藤を発見した山崎は、ルナたちが帰ってくるまでひたすら近藤を慰めていたという。



#### 第四話 私と饅頭と万事屋さん？（後書き）

やっと万事屋を出せて嬉しいです><！

他にも銀魂メンバーを出していきたいのですが取りあえずまたの機会に、ということでは、

**第五話 私と仕事と家出少年（前書き）**

更新、遅くなってしまいました！

今回より、「家出少年篇」が始まります（＾Ｏ＾）／

オリキャラが出てきます

## 第五話 私と仕事と家出少年

「……見つけたら、屯所に連れてきてほしい。」  
「……だるい……」。

朝の会議中。体がだるく、まだ眠いこともあり、まったく会議内容が頭に入ってこなかった。

入隊してから数日。大分、真選組にも慣れてきたルナ。  
真選組の仕事は、もっと事件ばかりで大変なイメージが頭の中にあつたが、事件は起きない平和な日が続いた。

だが、本当に大変なことは事件などではないことをここ数日で学んだと思う。

当然のことだが、副隊長という役職も結構忙しい。ルナの場合、その上に自分の同い年である上司が仕事をサボるが故ににそこもプラスされたのである。

今までは、副長の土方がすべて片づけていたと聞き、本当に尊敬する。

「以上だ。解散！」

「あの、ルナさん。昨日の資料……」

会議が終わった直後、山崎が話しかけてきたが、関係ない。ということ、ルナにとって外に出られる巡回の時間は一つの楽しみになっていた。

「巡回いつてきまゝす」

「ルナさん！？まだ巡回の時間じゃないでしょ！ちょっと、まだ仕事がつ…」

巡回というよりも散歩気分ですりすりと歩く。そして、巡回ルートにある公園に立ち寄る。

「ちょっと休憩…」

真っ直ぐベンチに向かって直行する。いつもこの時間帯は誰もいない…

はずが、今日は少し違った。

ベンチの隣にある大きな木の下にうずくまっっている少年がいたのだ。歳は15、16ぐらいだろうか。帽子を深くかぶり、膝を抱えて下を向いている。ピクリともしない。

「……？」

ルナが近寄ってみても、まったく動かない。「まさか……いやいや……」と思ったが、それはない……ことを願いたい。姿勢を低くし、話しかけてみる。

「君、どうしたの？」

話しかけると、少年はバツと顔を上げた。金色の所々跳ねた髪にビ―玉のような深緑色の目が現れる。

目の前に見知らぬ美少女が自分に話しかけていることに気づき、ルナの顔を覗き込む。

「おばさん、誰？」

まだ幼い声色で少年はルナに尋ねる。だが、ルナは、顔がサーっと青ざめ、眉をぴくぴくと動かす。

「あのね、おばさんに見える？これでもまだ18なのよ。っていうかおばさんってどのへんが？」

優しく言いながらも、怒りをあらわにして少年に言い聞かせる。少年はそのオーラを感じ、苦笑いしながら謝った。

「で？君はこんなところで何してんの？」

「だから、こつちも聞いているの！お姉さん誰？って」

お互いとも質問をしていたので、ここは年上から…とルナが答えた。

「私は、真選組一番隊副隊長の天王寺ルナよ」

少年にルナは懐から『武装警察 真選組一番隊副隊長 天王寺ルナ』と書かれた手帳を取り出し見せる。

その警察手帳を見て少年はすつと立ち上がった。

「ほら、見たことない？この隊服…ってアレ？」

少年の方を向いた。が、気がつくのと、先ほどまで目の前にいた少年が消えていた。少年の座りこんでいた場所には帽子だけが落ちていた。

辺りを見回すと公園の入り口で走り去っていくのが見える。

「ちょっと君！何で逃げるの！帽子忘れてるって！」

帽子を持ちながらあわてて追いかける。

少年もルナに追いかけていることに気づき、速さを増し逃げて行く。少年はまるで人間じゃないようなものすごいスピードを出している。

体力には自信のあるルナでさえ追いつかない。

「君！待ちなさ……」「キャッホーウウ……！飛ばすアル、定春ウウ……！」「」

バアアアン！

ルナは目の前で起きたことに目を疑った。一瞬の出来事であった。

少年が道を曲がろうとした瞬間、異様に大きい白い犬（犬：だと思  
う）が飛びだし、少年が衝突したのだ。少年はスローモーションの  
ように道端にバタリ、と倒れた。

白い犬にはチャイナ服を着た少女が乗っている。

「キヤアア！ちよつとーっ！！そのチャイナ服は万事屋さんのとこ  
のチャイナさん！？」

少年に駆け寄り、犯人の名を叫ぶ。だが、その犯人はもの凄いスピ  
ードを出したままこちらを見もせずに行ってしまった。

「ねっ、君！大丈夫！？」

「あはは…あれ？犬が見える。あれは数年前に居なくなった…何処  
行くの？俺も連れてってよ。ねえ」

少年は遠い目をしながら、太陽に手を伸ばす。その姿を見てルナは  
少年の肩をブンブンと振る。

「しっかりしてエエ！」

…少年が目を覚ました時には、目の前に先ほどの少女と少女と同じ  
黒い服の男たちがいた。



真選組屯所内、尋問室　　。

そこに居るのは近藤、土方、沖田のトッピーとルナに先ほどの少年机を挟んだ椅子には土方と少年が座っていた。

土方は睨みをきかせながら少年に問う。

「名前は？」

「凜斗。向むかい凜斗。りんと」

「歳は？」

「15です」

土方は続ける。

「親は？」

「家出してきたから…いません。」

フィと目を逸らす。

「決定だな。お前の親に捜索願い出されてるんだ。」

少年　凜斗は捜索願いを出されていることを分かっていたようで、ため息をついた。ルナから逃げていたのも、ルナに連れ戻されると思ったからである。

「ルナ、よく見つけたなあ」

「あ、はい。たまたまです」

そう言うルナであったが、小声で沖田と話していた。

っていつか、そんな捜索願いでたっけ？

さあ？朝の会議かなんかで言ってたんじゃねえかい？

まったく話を聞いていなかった一番隊隊長に副隊長である。

「……うち貧乏だから。俺だけでもいなくなればちょっとは楽になると思っ、家出したんです」

凜斗は俯く。家族のために家出していたのだ。

「最近、父さんも変な人たちと話してるし……」

変な人って？と尋ねる。凜斗は、しばらく考えた後答えた。

「多分、刀持ってたから攘夷浪士…だと思っよ。」

攘夷浪士、と聞いて土方や沖田がぴくりと反応する。ただの家出でも、攘夷浪士が関わっているなら放ってはおけない。

「俺、このまま家に帰っても何も変わらないと思う。お姉さんたち、警察なんだよね？なんとかできない…？」

少し控えめだが、しっかりと思いを伝えている。

そんな凜斗に心を打たれて、ルナは近藤に一つの提案をした。

「近藤さん。凜斗くんのお持ちはここにいる全員にしっかりと伝わったんじゃないでしょうか？そこで提案があるんです。…凜斗くんをこのまま帰すわけにはいきませんし、しばらく真選組まへんぐみにいてももらったらどうですか？」

「！？でもっお姉さん…そんなの悪いって…」

「でも、凜斗くんの言っとおり、このまま帰っても変わらないよ？凜斗くんはここにいて、攘夷浪士たちの捜査は私たちがする」

真っ直ぐな瞳で近藤に言っ。

「ルナがそこまで言っなら…そうするか！」

近藤もいつもの笑顔でニカツと笑う。ルナはほっと胸をなでおろした。だが凜斗はまだ遠慮している。

「局長さんまで…!」

「嫌なら無理にとはいわねえが。俺もここにしばらくいるのは賛成だ」

と土方も言う。「俺も」と沖田。誰も反対する者はいないようだ。

「じゃあ決定だな!」

近藤が凜斗の手をがっしりと掴む。

「…じゃあ、しっしばらくお世話になります!」

少し考えたが、手を掴まれたままみんなに流され頭を下げた。土方も沖田も頷いている。

こうして家出少年、凜斗はしばらく真選組に居候することになった。

そしてルナたち真選組隊士は、凜斗が関わる攘夷浪士を調査し、凜斗を無事に家に帰すことを約束した。

ここ数日、平和だった町が騒がしくなる。

「久しぶりにでっかい事件になりそうだな…」

と呟いた土方の心配は、数日後、本当に当たることになった。

## 第五話 私と仕事と家出少年（後書き）

オリキャラは向<sup>むかい</sup> 凜斗<sup>りんとう</sup>くんです！

この話は、長すぎず戦闘シーンも入れてでいきたいと思っ  
ていま  
す^-^-

それと、先日、新連載を始めました！銀魂の3Zものです。  
そちらの方も覗いていただけると幸いです！

## 第六話 私と刀鍛冶と凜斗（前書き）

なんか、タイトルが…；

刀鍛冶ってちょっとしか出てないのに><；

## 第六話 私と刀鍛冶と凜斗

無法者の集う街を歩く美少女。

整った顔立ちに雪のように真っ白な肌。透き通るような瑠璃色の瞳。

丈の短い、薄ピンクの地に白い小花が散った着物。

前に進む度に簪で留めているふんわりとした栗色の髪が揺れる。

よく見るとその少女の後ろには少年がいた。

そちらもまた、まだ幼いが所々跳ねた金色の髪に凜とした深緑色の目をしていて、前の少女にということくっついて歩いている。

そして少年は少女の袖を引っ張り近くの二階建ての建物を指差した。

少女が頷き、そこで二人は立ち止まる。

少女は引き戸を開けて、その建物の一階「スナックお登勢」に顔を出す。



「すみませーん、銀さんいますかー？」

「待ちな銀時イ！早く金払えエエ！」

「ギャアアア！ふざけんなババア！こつちくん！おつルナ！助け  
…」

ピシヤリ

笑顔のまま即行引き戸を閉める。少年の方は見てはいけないものを見てしまったような、困った顔をしていた。

「ね、ルナちゃん。今の…」

「見なかったことにしましょう」

そう言い少女たちは再び歩き出した。その後、断末魔が聞こえたが、二人は振り向かなかった。

\*

「副長。凜斗くんの場合、調べてみたのですが…」

副長室。山崎は凜斗の家に近づいている攘夷浪士たちの情報を報告していた。

「まず凜斗くんのお父さんに近づいているのは凜斗くんの言いつ通り攘夷浪士でした。」

うん、と土方は頷く。

「勝手な取り引きで凜斗くんのお父さんを騙して、借金をさせていたようです」

「どこの奴らだ？」

「それはまだ…」

土方はため息をつく。

(そこまで大きな組織ではないだろうが、また忙しくなるな。)

「そついや、ルナとガキは何処行ったんだ？」

「あ、ルナさんが刀鍛冶に用があるって言ってました。凜斗くんも付いて行きましたよ」

そついえばと思出し尋ねてみる。山崎はガキ、と聞きすぐに理解した。

「総悟は？」

この二人を聞けばあと残るのは沖田。

聞かなくてもおおよそどこにいるかは検討がつくが、一応聞く。

「沖田隊長ならさつきそこで寝てましたよ」

「あいつは……」

土方のストレスの原因は全て沖田にあるのではないか。

「あ、そうそう。局長見てませんか？」

今度は山崎に聞かれ、首を傾げる。近藤か……そう言えば見ていないが、

「どうせまたいつものだろう」

「そうですよね……」

『いつもの』……。二人で肩を落とす。困った上司がいたものだ。

「じゃあ、お互い頑張りましょう」

山崎はあっさりとそう言って立ちあがったが、土方は聞き逃さなかった。

「ちょっと待て山崎……お前今何て言った？」

睨みを聞かせる。山崎はしまった！と思ったが額にうっすら汗をかき、惚ける。

「え、いやあそれはその…」

「お互い頑張る…だと？お前と一緒にすんじゃねエエ！！」

「ヒイツ！すみません副長！ツ！！！」

ここでも断末魔が響いたが廊下を通りかかった隊士たちは当然無言で通り過ぎた。

\*

「ありがとうございます！」

刀鍛冶で刀を受け取り、ガラリと引き戸を閉めた。ルナはその刀を腰に差し、凜斗に声をかける。

「よし、じゃあ帰ろっか！」

「うん！」

凜斗はルナたちのような年上ばかりの所に居候しているからか、敬語を使ったり礼儀正しくしていたが、外に出ると子供らしくなった。

ルナには懐いてくれたようで他愛のない会話もしてくれた。それが嬉しい。とても初対面の時におばさん呼ばわりしたのを忘れるぐらいに。

歩いて帰るなかで色々な店を通る。その中でルナは声を上げた。

「あっ！近藤さん探して来いって言われてたんだっ！」

土方に頼まれていたことを思い出し、大体いそうな場所を書いてもらった地図を取り出す。

「凜斗、一人で帰れる？」

自分のことだ。どうせまた迷うのだろうということを考えると凜斗をつき合わせるわけにはいかない。

「大丈夫だよ」

「ホント！？じゃあ、ゴメンねっ！」

それだけ言い、ルナは駆けて行った。凜斗は慌てて駆けて行く様子を見て、手を振った。

屯所への道なら頭に入っている。ルナはとんでもない方向音痴だと聞いていたのでここ周辺の地図は出る前に頭に入れていたのだ。

「じゃあ、俺も帰るか」

トボトボと歩き出した凜斗は、誰かに跡をつけられているような気がした。

凜斗はその影に気づき足を止めて周りに人がいないことを確認し、路地に入った。

路地に入ると影もついて来たようで、後ろを振り向く。

「誰？」

「そんな顔しないでくださいよオ」

「……！」

そこにいたのは数人の浪士だった。凜斗は息をのむ。

(コイツ…!!)

「アンタ、旦那の息子さんですよネエ？確か…凜斗くんだったかね」  
路地は薄暗かったが、腰に刀をさしているのがわかる。

「何の用？」

「最近、アンタが出て行ったって旦那が騒いでましてね。こんな所にいたんですかア？」

数人の浪士の中でも先頭に立ち、凜斗に話しかけてきているのは家に居た時もよく見た奴だった。

「それに…さっき一緒にいたあの女…あの青い瞳、『碧眼の悪魔』、ですよネエ？」

(碧眼の悪魔？でもあの女ってことは…)

一瞬、疑問に思ったがルナのことだと理解した。

「『碧眼の悪魔』と言やア、あの鬼兵隊の暗殺部隊の隊長じゃあねエですかイ」

凜斗は男の言葉が理解出来なかった。次々と知らない単語が出てくる。

「本名は謎だが、あの青い瞳。間違いありませんねエ。アンタ、何か知ってるんで？」

「知らないよ。それにあの子は真選組だよ。」

自分が今、真選組にいるとまでは言わなかった。が、男は驚いたように目を見開いた。

「へエ、あの真選組に。」

「それより、父さんと母さんは？また借金だ何だっって言っていないだろうな！」

キツと男たちを睨む。男は薄笑いを浮かべている。

「そんなの自分の目で確かめればいいじゃないですかア？あつそうだ。こうしましょう」

男が何かを思いついたように提案してきた。

「真選組は私たちにとつちや天敵だ。だが、アンタがあんたの女を知ってるなら、真選組の情報を私たちに流してくれませんかねエ？そうしてくれたら旦那から手を引きましょう」

「…！？そんなのっ！」

「嫌だと言っなら、アナタの家族はどうなるか…分かってますよね？」

なんて卑怯な奴なのか。

確かに、今真選組に居候している凜斗なら真選組の情報をこいつらに流すことも出来るだろう。

だが、それは今世話になっている人たちを騙すことになる。自分に協力すると約束してくれた人たちを。

(情報を流せば家族から手を引いてくれる…。)

凜斗は意を決して呟いた。

「わかった…よ…」

「交渉成立ってことで。」

男はクククと妖しげに薄笑いする。



「これに連絡してくださいねエ。じゃあ、向ケン」

男は、凜斗に電話番号が書いてある紙切れを渡すとヒラヒラと手を振り、路地を出て行った。

何だか気が引けるが、仕方がないと自分に言い聞かせる。

( 父さん、母さんつ ……！！！！ )

路地に光が差し込んできた。

**第七話 私とストーリーカーと暗黒物質（前書き）**

最近更新遅くてごめんなさい！

今回はやけに長いです。

## 第七話 私とストーカーと暗黒物質

「ここって……」

ルナの目の前に広がるのは土方から受け取った地図に書いてあった道場の門。

地図には近藤がいそうな場所を書いた、と言われていたがこの道場しか書いておらず、まあそれなりの時間をかけやっとなつた。

土方が言ったのだからここにいるだろうと門を開けようとした時、声をかけられた。

「るーちゃん？こんなとこで何やってんですか？」

沖田だ。

「あ、そーちゃん。近藤さん探してんだけど……ここにいそう？」

目の前の道場を指差す。沖田はしばらく考えた後、「違いねエ」と頷いた。

沖田が言うなら間違いないと門を開けた。

大きい庭が目の前に広がった。だが、そこにちょうど、薙刀を持ったポニーテールの女が上司こんどうを突き刺そうとしている光景が目映った。

「お妙たえさーん！！俺はあなたのことが……」

「いつの間に浸入したんじゃこのゴリラアアアア!!!」

「姉上エエ!!!」

女の隣には見慣れた眼鏡の少年がオロオロと立っていた。

「何これ……」

「日常茶飯事でさア」

ポーカーフェイスであっさりと言った沖田。すると、眼鏡の少年がこちらに気づいた。

「あつ！ルナさん、沖田さん！」

どうも、と軽く頭を下げる。

「新八くん。何してるんですか？アレ……」

「すみません。助けてください！」

ルナの問いを無視し、深々と新八は頭を下げたが、いきなり助けると言われても困る。

まず事情を聞こうとしたが、近藤がこちらに気づき、手を振ってきた。

「あーっ！総悟、ルナー！」

ヒュンッ

近藤が少し余所見した瞬間、薙刀が近藤の横を通り過ぎた。

飛んできた先を見ると、女が黒い笑みを浮かべ微笑んでいる。

「待っててね新ちゃん。今ゴリラを排除かたづけするから」

女は言い放つ。あおの笑顔に恐怖を感じ、もう助かる道はないとルナは思った。が、

そこへ、引きつった笑顔の新八が近藤に助け船を出した。

「姉上!!」

「なあに、新ちゃん」

「お、お客さんです…」

「ちよっ新八くん　　っ!!!!」

「アラお友達?いらっしやい、ゆっくりして行ってね」

女はこちらに向き直り、さっきの黒い笑みをしていた女とは思えな

い程のとびきりの笑顔で言う。ルナはしぶしぶ家に上がることになった。

\*

「ストーカーですか…」

ルナは隣には沖田と近藤。目の前には新八と先ほどの女という形で座っていた。

近藤についての事情を聞き、がつくりと頂垂れた。

「そうなのよお。知らない間にゴリラがうちにいてね」

ゴリラ。むろん、近藤のことである。

「ゴリラですか！？そんな動物がお妙さんの家に！？」

いや、そのゴリラってアンタのことだから、と皆が呆れる中、声のボリュームを上げ、勘違いを続行する近藤<sup>ゴリラ</sup>。

「でも安心してください！そのゴリラ、この勲が……ゴブハアッ！  
」！

近藤の顔に、女の鉄拳が炸裂した。女は相変わらず笑顔のままだ。

ちよっ、総悟っ！いいの？いいの？

大丈夫でさア。……多分。

多分って何！

内緒話を交わす沖田とルナ。幸い女は気づいていないようだ。

「そっそう言えば自己紹介がまだでしたね」

新八が言った。女もそれに賛成する。

「そっね。私は、新ちゃんの姉の志村しむら 妙たえです」

姉、と聞き隣の沖田を少し見た。

(新八くんってお姉さんいたんだ…)

「真選組一番隊副隊長、天王寺ルナといます」

「ルナちゃんね。新ちゃんとは……？」

自己紹介を済ませ、妙が問う。

「万事屋さんで会いました」

まあ、と口元に手を当てる。すると、にっこりと恥ずかしそうに笑った。

「やだ私ったら。てっきり新ちゃんの彼女かとおもっちゃったわあ」

しばらくの沈黙が流れる。

「そんなわけないじゃないですかあ〜！妙殿お〜！あり得ませんって！」

「ルナさん、ヒドイです」

笑顔で否定したルナに妙も続ける。

「そうよねエ〜、新ちゃんがこんな可愛い彼女連れてくるわけないもの〜！」

「いや、あんまりです姉上…！」

「どうせ、ゲームで作った彼女もどきを紹介するに決まってるわ！」

「ちよつと姉上エエエ！！！！」

新八は泣け叫ぶ。

苦笑いするルナに妙は小声でささやいた。

「冗談よ。沖田さんでしょう？お似合いだもの」

「何言ってるんですかああああ！！！！！！」

新八の時とは打って変わって変わって顔を真っ赤にする。沖田の方をチラッ



と見た。だが、気づいていないようでホッとした。

「ごめんなさいね。待ってて、お詫びに卵焼きもってくるから」

クスクスと笑い、妙は立ち上がり、奥に行く。

だが、妙が卵焼きを持ってくると言ってから急に部屋が静まり返った。新八、沖田は異様な程に汗を掻いている。

ルナはその二人を不思議に思いながらその場で待つ。部屋にはルナ、新八、沖田、近藤（気絶中）だけになった。

新八が口を開いた。

「ルナさん。今のうちに帰って下さいってどうか、逃げて下さい」

「え？」

静かに言ったので首を傾げる。理由を聞こうとしたら、急に隣の沖田が立ち上がった。

「邪魔したねイ」

近藤の首根っこを持ち、出て行こうとする。それを追い、ルナも立ち上がった。

「ちょっとそーちゃん！」

「さあ、ルナさん、早くしないと…アレが…」

「ルナちゃん！」

その瞬間、妙が顔を覗かせた。手にはお盆を持っている。沖田はその姿を確認した途端ささつと縁側から外に出た。

いきなりどうしたのかと戸惑っているルナであったが、妙の持っているお盆の上に乗っているものを見て、悟った。

（どっどどが卵焼き

！？）

そこに乗っていたのは…そう、まさに謎の暗黒物質<sup>ダイクマター</sup>。ルナも沖田を追うようにして外に出た。

「妙殿ごめんなさい。用事が出来てしまったんです！折角作っていただき申し訳ないんですけど…」

あれって可愛そうな卵焼きじゃん！もう卵でもなんでもないじゃん！

「アラ、そう？じゃあまたの機会にね。でも折角作ったから、新ちやんが食べなさい」

「え！？ちよつと待って姉上！ギヤアアアアアアアア！！！！」

気の毒そうに志村家を見て、ゴメン新八くん、と心の中で謝った。

\*

「はあ、びつくりしたあ妙殿のアレ、卵焼きでも何でもないよ…」  
「あの暗黒物質にはいつ見ても驚かされますからねイ」

屯所に帰る道を歩く。その時、ルナの携帯電話が鳴りだした。誰だろつかと開いてみると、

土方十四郎

途端に顔が青ざめた。沖田も隣から画面を覗き、「げっ」と声を上げた。

出ないわけにはいかない。おそろおそろボタンを押したが、予想通り第一声は

『今どこにいるんだ！！たく連絡もせずに！！』

怒声だった。電話でも、相当機嫌が悪いことがよくわかる。

「じつごめんなさいっ！」

『総悟も一緒何だろ？近藤さんは？』

何故沖田が一緒なことを知っているのか聞こうとしたが、また怒られそうをやめた。

「いますよ。気絶してますが」

『まあいい。ガキは？』

「凜斗…ですか？先に帰しときましたけど」

首を傾げる。そろそろ着いてもいい頃だが。

『そうか。ルナ、お前らはすぐに来い。攘夷浪士の情報が掴めた』

「わかったんですか!？」

『ああ。そのまま現場に向かえるか』

「はい」

心を落ち着かせる。攘夷浪士と戦うことになるだろう。ルナは『真月光』を見た。

『場所は屯所の近くの廃工場。俺は山崎とパトカーで向かっている。念のためだ。準備しとけ』

「すぐ行きます」

念のため。土方としてはあまりルナに刀を握らせるようなことはしなくなかった。出来ればルナたちが来る前に片づけていたいと思っ

た。  
電話を切る。ルナは心を決めていた。

沖田もその雰囲気察して、ルナを見た。

「ルナ」

「行こう。総悟」

凜として真っ直ぐ向こうを見ているルナを見て、沖田は前のルナとは違うオーラを感じた。

（るーちゃん…）

沖田もルナに刀は握らせまいと心に決めた。

…その様子を遠くで見っていた人物もまた、決意を決めていた。

「ゴメン…ルナちゃん」

第七話 私とストーリーカーと暗黒物質（後書き）

あ、近藤さん忘れてた。

## 第八話 私と廃工場と紺柄党（前書き）

アニメの銀魂、OP、ED一月からまた変わるらしいですね！

オープニングはFLIPさんで「ワンダーランド」、エンディングはGood Comingさんで「仲間」だそうです

OPのFLIPさんは以前よりぬきの「カートニアゴ」を歌った方！大好きだったのでまた楽しみです^^

バラガキ編もありますし、そろそろ真選組メインの歌がきてもおかしくないんじゃないかな… 願ってます！



## 第八話 私と廃工場と紺柄党

パトカーが数十台程停まっている。

黒い服を着た男たちの目の前には廃工場がそびえ立っていた。

その少し後ろにいた男 土方は、イライラしながら待っていた。

そこへ、一台のパトカーがキキツ、と停まった。ドアを開けて、降りてきた少女がこちらに駆けてきた。

「十四郎さん、遅くなってすみません！」

ルナは土方の横で頭を下げた。土方はずっと目の前を睨んでいる。

「今、令を出す」

手で動作をしてルナに、下がっているようにいう。ルナはそれを後から出てきた沖田に伝える。

土方はルナが下がったのを確認し、右手を掲げた。

「行けエエエ！！！」

合図と同時に黒い服の男たちは中に入って行った。その後を土方も追う。

が……

その場にいた全員、目を疑った。そこに、攘夷浪士は一人もいなかったのだ。

優れた監察が入手した確かな情報だった。ここに攘夷浪士がいた形跡も残っている。

「何でイ、こりゃあ……」

ここにはいなかったのではない、逃……げられた。

「知られてた、ってこと……ですよね」

(どっしり……)

誰もいない空からの工場の前でただ立ち尽くすことしか出来なかった。

「っ！何だ、これは……」

「近藤さん、反応遅いです」

後から降りてきた近藤は状況がまったく飲みこめなかった。

パトカーでは誰も口を開かなかった。

運転している山崎が助手席のルナに話しかけてきて少し話したただけだ。

今また山崎に話しかけるのもどうかと思い、窓の外をボーッと見ていた。だが、外に見知った人物が歩いているのを見かけ「あつ」と声を上げた。

「凜斗！」

「え？」

ちょうど信号で車も停まり、隣の山崎も窓の向こうを見た。そこには、下を向きながら歩いている凜斗の姿があった。

「ザキ！下ろしてっ！」

ルナはドアに手をかけて今にも飛び出しそうな勢いだ。いくら停ま

\*

っているからと言っても危険すぎる。

「ダメです！もう信号変わりますよー！」

「だって！凜斗も乗せてあげようよー」

「それはそうですね…」

前の騒ぎを聞き土方も窓の向こうの凜斗を確認し、ルナを止める。

「ルナ、やめろ。危ねエぞ」

土方にもそう言われたが、とうとうルナはドアを押した。

バンッ！

ルナがドアを開けると信号が赤から青に変わり、山崎がアクセルを踏むのが同時だった。風がゴーゴーと車内に入ってくる。

「オイイイイ！ドア開けっぱなしで走る車があるかアアー！！」

「もう止まれませんって！ルナさん、早くドア閉めてください！」

アクセルを踏んだ山崎を叱る。ルナは身を乗り出し、前方に手を振った。

「凜斗オオオー！！うわあっ気持ちいいー！」

「楽しんでる場合かアアー！」

「あ、良い子のみんなはやっちゃいけないよ！」

名を呼ばれ、凜斗は振り返る。辺りを見回し、走っている車の中でこちら側のドア全開のパトカーを発見した。

よく見れば見知った顔の少女が身を乗り出してこちらに手を振っているのではないか。後ろではその少女を必死に止めようとしている。

「ルナちゃん！？危ない！危ないよ！落ちちゃって！」

走りながら会話する。

「早くドア閉めるオ！」

「えー！？楽し『バゴオン！！』」

直後、ルナの頭にどこから飛んで来たのやらヘルメットが直撃した。

「ルナーっ！？」「ルナちゃあああん！？」

土方と凜斗が絶叫する。気絶したルナを揺する土方の隣で顔を手で覆った沖田は

「くっくっく…一体…誰がっこんなことっ…くっくっ」

笑いをこらえていた。

「お前かアアア！！！」

「副長ー！そこで停まりますからもう少し抑えてください」

運転しながら土方を抑えようとする山崎も角を曲がり急ブレーキをかける。

だが

山崎の曲がろうとした角から今度は原チャリに乗った男が飛び出してきた。

ほんの一瞬、男は山崎と目が合い「げっ」という声を上げた。

ドカアアアーン！

「みんなあああ……！」

煙がもくもくと立ち上がる。

原チャリ、パトカーは故障、負傷者5名という事故を目の前で目撃した凜斗はただその場で立ち尽くすことしか出来なかった。

「俺、関係ないよね……？」

数日後。局長室で、今回の事件の情報確認をしていた。

「攘夷浪士『紺柄党』のリーダーは紺野という男です」

部屋には近藤、土方、沖田、ルナ、山崎、そして凜斗。そして凜斗。近藤と凜斗以外は全員頭なり腕なりに包帯を巻いている。

（紺野 ……）

紺野と聞いた瞬間、凜斗が下を俯いたのには誰も気づかなかった。

「ったく、一体どういうことだったんだ」

廃工場へ駆けつけて以来、何度も監察が入手した手掛かりを元に攘夷浪士たちの跡を追ったが、廃工場の時と同じ結果になっていた。

「裏切り者がいるってことですかねィ」

沖田が口を開いた。皆、思っていたことだ。

凜斗が口を開いた。

「……俺、用事思い出しちゃいました」

立ち上がり出て行き、パタンと襖が閉まる。凜斗が出ていくのを見届けた後、土方は

「ルナ」

ルナの目をじっと見つめた。「何です」と返事をする。

「お前、あの時何でドアを開けてまでガキの近くに行こうとした」

あの時、パトカー内での出来事だ。

土方は、ルナが「面白いから」なんていう理由であそこまで必死に凧斗を自分たちと近づけたわけではないと分かっている。

どうして凧斗を呼びとめたかなんて考えもしなかったし、気になってもいなかった話を真剣に尋ねた土方を見て山崎は目を見開いた。

「あの時　　あの時、凧斗の近くに誰かいたんです」

「!?!?」

落ち着こうと深呼吸し間をおいた。

「誰かはわからないんですけど、こっちの方も見てました」

「そうか…」

それが誰なのか、大方予想はついているがまた新たな疑問が生まれた。近藤や沖田も真剣な顔で考え込む。



そんな中、襖がぱつと開いて一人の隊士が入ってきた。

「局長、副長。こんなものが…」

隊士は一礼し土方に封筒を渡した。

「怪しげな男がつい先ほどやってきまして…これを副長に渡せと」

「ご苦労だった」

隊士がまた出て行き、何も書いていない茶色の封筒を開けた。そこには…

『初めまして、真選組の皆さん

せん。  
廃工場にてご対面したい。以前のようにには致しま

党 紺野』

紺柄

丁寧な整った字で、三行、文が書かれていた。

土方は全員に目で合図し、コートを羽織った。

「行くぞ」

## 第八話 私と廃工場と紺柄党（後書き）

紺柄党こんぺいとうは当て字です。

紺野さんも紺柄党の「紺」に「野」を足しました。（野はどこから出て来たんだ！）

第九話 私と武道と家出少年入隊（前書き）

家出少年篇とうとうクライマックスです！

## 第九話 私と武道と家出少年入隊

以前はスパイから真選組が来るとの情報を聞き、逃げた。

スパイは、必要な時以外顔を合わせようとしなかったが、交渉通り情報はしっかり流してきた。

「やあ、向ケン」

手を上げると、不機嫌そうな顔でこちらに来た。

「いきなり呼び出して、何？」

まだ幼いのためにもっと可愛く言ったらどうだ、と思つ。

「いや……そろそろ君に伝えないといけないことがあってねエ」

「もう君は……用済みなんだよ」

「!?!」

予想通りの驚いた顔。そう。もう用済みだ。

「約束が違うじゃないか！父さんたちから手を引く約束だっただろ  
う?」

その通り。最初から手を引くなんてするつもりもなかった。つまり、  
真選組を潰すためだけにお前を使ったということだ。

この後、真選組が駆けつけてくるだろう、そこで潰す。

手を挙げ、パチンと指を鳴らす。すると、周りから仲間の攘夷志士  
たちがでてくる。

もちろん、腰には刀を差している。

「行け」

「…っ!」

凜斗がもう手遅れだと思った瞬間、廃工場に光が差し込んだ。

「御用改めである！真選組だアアア！」

「チツ……もつきたか…予定変更だ！」

計画とずれた紺野は舌打ちをし、令をだした。

真選組隊士たちは鞘から刀を抜き目の前にいる敵に走っていく。

攘夷浪士たちも刀を抜き、隊士たちと刀を交えた。

「くそっ……」

「皆さん……何で……」

「ご招待ありがとうございます。紺野さん」

ルナは紺野に笑顔を向けて凜斗に手を振った。

驚いている凜斗の様子から、凜斗は紺野が真選組をここに招待したことを知らないようだった。

「凜斗。一緒に帰る」

微笑んでから、視線を隊士たちの方に向ける。

「いけるか」

目の前を見ながら後ろに立っているルナに話しかけた。

「土方さん」

だが、返ってきたのは沖田の声。後ろを振り向いてみるとそこにルナの姿はない。

「ルナ、いつちまいましたぜ」

ではどこにいるのか。沖田に問おうと思った瞬間、どこからか隊士の鋭い声が飛んできた。沖田も気づき、目を見開く。

「副長っ！」「土方さん！」

しまったー！！



背後に殺気を感じた。土方の背後から敵が襲いかかってきたのだ。迎え撃とうと刀に手をかける。

だが敵の姿をとらえた途端、自分に斬りかかろうとしていた浪士はバタリと倒れた。

倒れた浪士の背後にいたのは

「ル…ナ……？」

血に塗れた刀を真っ直ぐ持っている。

下を向いていて表情がよく見えなかったが、いつも笑顔を絶やさなかったルナとは思えなかった。

「すまねエ。助かった」

礼を言おうとしたが、ルナは斬りかかりにきた浪士たちを迎え撃つためにまた乱戦の中に飛び込んでいった。

立ち尽くす土方にふと、浪士たちの話声が耳に入った。

「何だあれ…」

「……！あの瞳……『碧眼の悪魔』じゃねエか！？」

碧眼の……悪魔？

もつとよく耳を澄まそうと集中する。

「嘘だろ！？『碧眼の悪魔』といやア、あの鬼兵隊の……」

「間違いねエよ！あの青い目、悪魔のように敵を斬り倒していく立姿。あの太刀筋、一瞬で相手の急所をついてやがる」

鬼兵隊、青い目、太刀筋……

土方はその『碧眼の悪魔』がルナであることに気づいた。

だが、鬼兵隊の幹部でもそんな通り名は聞いたことがない。有名でなければこの浪士たちが知っているはずはないだろう。

ただ土方は、敵を斬り倒していくルナを見て土方の知っていた昔のルナとは違うことだけ分かった。

今のルナにいつもの花のような笑顔をする姿は想像できない。

それを見て、確かにしばらく会っていない間ルナは変わったんだということを感じた。

だが　　土方にはわかった。

敵を斬って進むあの澄んだ瑠璃色の目が怯えている

。

「土方さん」

そんな事を考えていたが沖田に呼ばれる。

「るーちゃんのあの眼、怯えています」

沖田も感じたようだ。気づいていたか、と返事をする。

「俺はあんなるーちゃん見てらんねエヤ」

沖田は鞘から刀を抜き敵へ向かっていった。

攘夷浪士を捕まえにきたのならわかる。だけど、「帰ろう」「そう言った。

何で？どうして？

自分が裏切っているのくらい知ってるんでしょ？

何で帰ろうなんて言ったの？

俺が必要なわけでもないのに。

「凜斗！」

襲いかかってくる攘夷浪士たちを次々と斬り倒してとうとう凜斗の元にやってきたルナは、先ほどの悪魔とは思えない顔で微笑む。

漆黒の隊服は鮮やかな鮮血で染められている。

そして、警戒して刀を抜こうとする紺野を睨みつけた。

「来ないで！」

咄嗟に叫んだ。ルナが怖かったのではない。

「俺はみんなを裏切ったんだよ！？家族を助けたいなんて言っても助けられないし……」

下を俯き悔しそうに言う。

「利用されるだけされて……迷惑かけて……誰も俺を必要となんかしてない」

「ハハハッ、その通りだ！お前はもう用済みなんだよ！」

とどめをさすように言う紺野。

その言葉にルナの肩がピクリと動く。

「用済みですって？真選組の情報はもう要らないから凧斗も要らないって？」

紺野を睨みながらルナは少しずつ、歩み寄ってくる。

「そんなことない。凧斗が裏切っていてもそれは本意ではないことくらい知ってる。家族のためにアナたちに協力してたことくらい知ってる。そうじゃなきゃこんな輝いた瞳しないもの」

凧斗の脳裏にルナと話している時の光景がよぎる。

「ルナちゃん……」

「私という時のあの笑顔は嘘じゃないでしょ？」

立ち止まり真っ直ぐと見つめる。

「誰も必要としてないなんて言わないで。私たちにはあなたが必要な。凜斗」

そして、紺野に刀を突き付ける。

「紺柄党の紺野さん。この『真月光』にやられたくなかったら、屯所まで御同行願います」

刀を向けられて後ずさる。

「そんなっ！でもこっちにはまだ……いけエ！野郎共！って……アレ？」

「ルナ！こっちは片づけたぞ！」

そこには一つにまとめられた攘夷浪士たちの姿があった。

「……くっ……」

こうして、攘夷グループ紺柄党は真選組の手により壊滅したのであった。

「父さん！母さんっ！」

凜斗は駆けつけてきた両親に抱きついた。母親は泣きながらルナたちに礼を言ってきた。

父親は凜斗に何かをささやき、背中を押す。

そのままこちらに駆けつけてきて頭を下げた。

「ごめんなさい！俺、俺……」

言葉を繋げようとした凜斗を土方は遮った。

「家族を護った。護りたいものを護るのは立派なお前のルルの武士道だ」

「気にしないで。それより怖かったですでしょう？怪我は？」

「平気！」

にっこりと笑って見せてきて、安心する。

「戦ってる時のみんな、すごいカッコよかったよ！」

暗い顔をしていた凜斗に前のような笑顔が戻った。

「ねえ凜斗。あなた真選組に入らない？」

「え？」

キョトンと不思議そうな顔をする。土方と沖田も頷いた。

「でも、俺刀も何も使えない……」

「俺がきっちり教えてやりますぜ」

「だって、まだガキだし……」

「気にすんな」

「おいだよ。凜斗！借金だっここで働けばいいし」

ルナは凜斗に手を差し出す。

凜斗はチラッと後ろの両親の方を向いた。父親は拳をつきだしている。

「私たちにはあなたが必要なの」



凜斗は、ルナの手をとった。

これで「めでたしめでたし」と言いたいところだが、これでは済ますことを納得しない人物がいた。

それに気づいた土方の眩きはその人物にだけ届いた。

「あ、近藤さん忘れてね？」

「トシ~~~~~~~~!!!」



## 第九話 私と武道と家出少年入隊（後書き）

ルナ「また近藤さん忘れてるし…」

いやあ…どうしてでしょう。居るはずなんですが、セリフがないからかな？

ルナ「あつ、作者の頭の中にはいるんだ…でもそれ考えたらザキは？」

どこにいるんでしょうか…

ルナ「頭の中でもないの!？」

近藤&山崎「ヒドイ!…」

**第十話 俺とみんなと真選組の桜（前書き）**

今回は後日談みたいな感じですよ。

これからよろしく頼んだよ凜斗くん！

## 第十話 俺とみんなと真選組の桜

皆さんこんにちは、向凜斗です。

先日、俺は両親に楽をさせるために武装警察真選組の一番隊隊士になりました。

局長は近藤さん。大きくてお父さんみたいで、喜怒哀楽がハッキリしてる人ってこういう人だなあといつも思います。

副長は土方さん。クールで二枚目でカッコイイけど、そういう人だからこそ裏に人には言いづらい事があると云うことをたった今、知らされました。

俺の所属する一番隊の隊長は沖田隊長。真選組随一の剣の使い手で、竹刀も持ったことがない俺に毎日稽古をつけてくれます。

監察は山崎さん。何て言うか、遠まわしに言うとう居ないとアレ？つてなるけど居てもたいして変わらない人……まあ、一言でいえば地味。

……副隊長は俺の憧れる人でもあるルナちゃん！可愛くって優しくって……俺を真選組に誘ってくれました超美少女です。上司と部下の関

係にありますが、ときどき、俺の方が先輩になったりします。

え？ルナちゃんだけベタ褒め？細かいことはあまり気にしないでください。

今は俺の入隊パーティーを局長の近藤さんが開いてくれたのですが、向凜斗、只今人生最大のピンチ何じゃないでしょうか……。

「大丈夫だって凜斗！」

ルナちゃんは明るくそう言っただ俺の肩を叩く。

「平気ですア。多分。」

「多分って何ですかあ！」

俺の目の前にあるのは、とぐるを巻いた黄色い物体。

「本日のメインイベント！」とか言っただ副長が持ってきた。青ざめている俺の横で副長は堂々とソレを食べている。

「洗礼なの洗礼！みんな一度は食べたことあるのよ〜！」

「ルナちゃんも……？」

「私は……昔から結構食べてるから……隊士みんなは全員食べた瞬間気絶したらしいけど……」

目線をそらしながら小さい声で言ったルナちゃん。俺は即刻立ち上がり脱走しようとした。

「待て」

が、副長に首根っこを掴まれ連れ戻された。

「土方スペシャルだ土方スペシャル。ただのマヨネーズだ」

(ただのマヨネーズ…どこが?)

また下を見てゴクリと唾を呑んだ。この井どんぶりに乗ったこの物体がマヨネーズだと判明しても手をつけられない。

「はっはっは！トシ！もうやめてやれ、凜斗がかわいそうだ」

「ダメだ近藤さん…こうなったら無理やり…」

爆笑しながら俺を救おうとする局長に副長は真剣な顔で反論した。

副長は片手で井を持つたまま俺を掴んだ。

やめて！沖田隊長とルナちゃん笑い転げるのやめて！

「ちょっとちょっと待ってくださいっ！

待って！ギヤ

あああああ！」

うまくやっついていけるのでしょうか、心配です。

\*

ルナは屯所の廊下を鼻歌まじりに歩いていった。手にはジョウロを持っている。

右に曲がり、左に曲がり、右、左……

廊下を進んでいると、すれ違った山崎にとめられた。

「また迷子ですか？」

「あのね、ザキ。これからは『迷子』じゃなくて『旅人』って言ってくれる？」

「何が旅人！？カツコよく言ったって迷子は迷子でしょ！？」

自慢げに言うルナに、はあ……とため息をつく。

「ルナさん、どこに行きたいんです？」

「庭！」

「逆方向です、すぐ後ろ」



指をさして山崎は呆れながら答える。もう何回ルナに道を教えただらうか、両手を使っても追いつかない。

ルナは礼を言い、山崎に言われた通り来た道に戻って行った。

(ちょっと見てよう)

嫌な予感がして、その場に立ち止まり姿が消えるのを待っていたが、案の定、ルナは指でさしたところを通り過ぎて真っ直ぐ道を進んでいった。

「ちょっと待ってエエエ！そこ！そこです！」

「あ、こっちか」

笑いながら襖を開けて外に出て行った。

「はあ……ルナさんの方向音痴もここまでとはなあ」

それを見送り、山崎が呟く。自分も進もうとすると、目の前に沖田がいたことに気づいた。

「あ、山崎ィ」

「沖田隊長いつからそこに……」

「今のーちゃんとのやり取り見て思い出した。山崎、おまえ切腹な」

さらりと言われて顔が青ざめる。

「え！？意味分かんないですって！」

と言おうと思ったが、頭の中で前にもルナに道を教えて沖田に切腹しろと言われたことを思い出す。

沖田は黒い笑みを浮かべて刀に手をかける。

「覚悟！山崎イイイ！」

「ギヤああああー！！」

「？」

襖の向こうから沖田の声と山崎の悲鳴が聞こえたような気がしたルナだったが、気にしない。

ルナはそのまま以前植えた枝垂れ桜の苗の前まで行き、しゃがみこんだ。

「ゴメンね。ドタバタしてて水あげ忘れちゃってたの」

そして持つてきたジウ口で根もとの方に水をかける。にっこりと微笑みながらまるで人と話すように桜に語りかけた。

「新しい隊士が増えてね。私より頭いいし、足早いし……剣術はまだただだけど飲みこみ早いし」

桜は前と特に変わったことはなかったが、少し葉が増えている。

「また賑やかになったんだ」

花のような笑顔で言う。

「けどね。攘夷浪士と戦う時…十四郎さんを助けるために刀を抜いた時、正直すごく怖かった。」

表情は途端に暗くなり、下を向き俯いた。

「怖かった…怖かったの…」

何が怖いのかは自分でも分からなかった。

ただ、ルナの目は人を斬っている時のように怯えていた。

「ダメだなあ……私」

もっと強く、強くならなくちゃ

怯えていてはいけない

自分を護るために…

ドクン

心臓の音がよく聞こえた。

自分を護る？

「私って何者なんだろう…」

ふと頭に浮かんだ。

目が覚めても誰もいなかった。

家族もわからない。どこで生まれたのかも自分が何者なのかも。

私って …

「ルナー！ちよつと来てくれーっ！」

「はぁーいー！」

何も知らない自分のことを考えていたが、呼ばれて立ち上がる。

ジヨウロが空からになったことを確認して、また桜に話しかける。

「ゴメンね。なんか変なこと言つて。って、話しかけてる時点で変か」

何故この桜に話しかけたのだろう、と自分に疑問を抱くが、あまり深く考えないのがルナーである。

「いつか、分かる時が来たらいいなあ……………」

桜はルナーのあげた水と、キラキラと光る日光に照らされてぐんぐんと成長していった。



第十話 俺とみんなと真選組の桜（後書き）

タイトルに「俺」と出ているので凧斗メインの話かな？と思った方、途中からまったく凧斗出てませんね…申し訳ございません；

次からは長編の準備をしたいので、日常系になります。

それが終わったら、結構長くなると思われる（多分）長編に移りたいと思います

## 第一話 私と破壊神と里帰り（前書き）

えーと……皆さまお久しぶりです。

もう目次ページを見て気付いた方もいらっしゃるかも知れませんが、私、以前の話で次からは日常編で行くと言っていたのですが、勝手ながらその日常編の後にやるはずの長編を先に投稿することになりました。

楽しみにしてくださっていた方、本当に申し訳ございません！<

何故そうなったのか……それは、ただ単に日常編でやりたかったお話がこの長編を終わらせないとできないからです！

………勝手すぎますね。すみません。

ですが、この長編過去篇になりますので大分重要なお話となっております。ります。

私の予定している話数よりも長くなってしまつかも……；

えっと、でも見て下さると嬉しいなあと思います。

それでは、長編『武州篇』のスタートです！



## 第一話 私と破壊神と里帰り

辺りに広がるのは一面の畑、畑、畑……。

いかにも田舎という感じの殺風景な場所に立つ三人の男と一人の少女。

四人の間をスーツと風が通り抜けると、後ろの金色の稲穂が揺れる。

少女は持っていたトランクを下に置くと、思いつきり息を吸い込んだ。

「ただいま　　っ！！！」

ルナたちは今、友を作り、剣を学び、共に成長した場所に里帰りしていた。　　武

\*

数日前。

「里帰り!?!」

近藤の驚いた声が部屋に響く。ここは、警察庁長官室。  
近藤の前にいるのは幕府直轄の警察庁長官、まつだいかたくりこ松平片栗虎。

その松平に近藤、土方、沖田、ルナは呼びだされていたのだった。

「あの……おじさま。里帰り……って武州に帰るってことですか？」

ちなみに、ルナと松平は今日が初対面だった。目の前にいるのはサングラスをかけたただのおじさん。

土方の話だと、攘夷浪士からは『破壊神』と呼ばれ恐れられているらしいが、とてもそうとは思えなかった。

「おじさまだなんて嬉しい呼び方してくれるじゃねえ〜か。そんなルナに今度休暇をやるう」

「勝手な約束しないでくれ、とつつあん」

土方が必死に止める。沖田に乘せられて普段でもサボっているルナ。ただでさえ仕事をあまりしないのに休暇なんてもらったら自分の仕事が増えるに決まっている。

「ま、武州に帰ってる間は仕事しなくていいんでしょ。それなら俺は大賛成ですぜ」

「お前のせいで素直に行けねんだよ！」

殴りかかる土方をヒョイと沖田はよける。

「とにかく今回は遠慮しておくよ。トップ4がいなくなったら江戸がどうなるか心配だしな」

普段は熱でも働けっという松平がこんなこと言っはさすがない、という自分の勘を信じて、松平に納得してもらっよう強く言っ土方。

「聞こえねエな」

「聞こえてんだろ！どんだけ行かせてーんだテメエは！」

惚けたようにそっぽを向いて答えてきた。

「そっだよなあ…俺達が留守の間何かあつたら……」

「大丈夫ですよ！山崎も凜斗もいますし、折角里帰りして来いって言ってくださいるんですから素直に行きましようよう！」

心配する近藤とは逆にもう行く気満々なルナである。

「いや、絶対何かあんだろ。とっつあんが休んでこい、なんて気のきいたこと言っハズねえ」

警戒する土方。だが、そんな土方に「考えすぎでさア」と言っ沖田。

「そんなに行きたくなエならこのままここで永眠するかア？」

ベストの中からスツと拳銃を取り出し、床に一発撃ち放った。

「うおおおおおー！！」

「待て待てとつつぁん！」

「オラ、3数えるうちにさっさと決めやがれゴリラ！ハイ、いーち……」

バン！

また床に撃たれ、のけ反る近藤。

「2と3は！？」

「そんな数字知らねエな。男は1だけ覚えてりゃいいんだよ。もう決めたる？また撃つぞ」

「行く！行きます！いや、行かせてください！」

命のために必死に答えた。近藤が承諾した途端、ハイタッチをする沖田とルナ。

「やった、全力で楽しんでこようぜーちゃん」

「うんっ！早速、荷造りしてきますねー！」

そう言うルナはドアに向かって走って行った。

「ほらルナはもう行く気満々だぞ。トシ」

「っ…あー！もうしょうがねえな！」

土方も無理やりだが納得し、安心する近藤。三人はルナを追うよう

にそのまま部屋を出て行くようにする。

「おい」

だが、松平に呼びとめられて足を止めた。

「折角チャンスをくれてやってるんだ。しっかり言ってこいよ」

言ってこい　　。

そういうことか、と納得した土方は松平の言葉を理解して心の中で礼を言った。

「分かってますア」

返事をする、と、沖田はそのまま歩き出した。

姉上、短い期間ですが、武州に帰ります。るーちゃんも、一緒に。

るーちゃんは、まだ姉上のことを知りません。

きっと驚くでしょう。そして悲し

むでしょう。

るーちゃん泣かせたら、姉上怒りますよね。

野郎のこと知ったら、きっと……

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
.

## 第二話 私と武州と……（前書き）

お久しぶりです！

2011年、今年最後の投稿になります！

注意：今回は、展開が早すぎます…



## 第二話 私と武州と……

「キヤーっ！変わってないよ〜！」

「はしゃぎすぎだろ……」

道場の門の前で騒ぐルナ。

まず何処に行きたいか意見を聞いたところ、全員一致で一番初めに行きたいと言ったのがこの道場であった。

武州に里帰りをするなど思ってもいなかった四人は久しぶりの故郷を大いに満喫しようとした。

幸い、今日道場は休みだったらしく、道場主に許可をもらった後は好き放題見て回ることができた。

「懐かしいなあ」

「あ、よくここで遊びましたよね〜」

「飽きもせずずっと走りまわってたよな」

「あ、よくここで土方さんにこの世から去ってもらおうと呪ってたな〜」

「何っーことしてんだテメエは！！」

昔を思い出しながら思い出に浸る四人。

楽しかった思い出や嬉しかった思い出がスライドショーのように頭

を駆け巡る。

「ルナはよくここでウロウロしてたよな！」

「この時からとんでもねエ方向感覚持ってたよな」

「失礼だな〜！とんでもないって…」

「じゃ、東西南北でも言ってもらいましょうかね」

挑戦的な悪戯っぽい笑みを浮かべる沖田。

「いいよ！みんな私を低く見すぎだつてば〜」

そしてそれに乗る。近藤、土方はいくらなんでも東西南北くらいはわかるだろう、と思っていた。

が、

「あつちが東で〜こつちが西？南はそつちで、残ったここが北！」

四方を指差しながら自信満々の笑みでこたえたが、三人は呆れながら言い放った。

「」「」「まったく違う……」「」「」

そう、ルナは見事に全部バラバラの方角を指差していたのだ。

間違いを指摘され、ふてくされる。

「……………まっ前までは本当にあっちが東だったんだからあー！」

「んなワケねーだろ！」

場所変わって、四人は広い稽古場に来た。

「あ！よくここにみんなで泊まりましたよねっ！」

「そうだな！ルナが道場に来たばかりの時、どこに住むかって話になって……………」

目を細め、懐かしいなあ、と一つずつを思い出しながら語りだす。

「俺たちに迷惑かけないようにつて、この道場に居候するとか言い出してよ」

「だってー！みんな、うちに来いって言って選べないんだもん！」

苦笑しながら話す土方に頬を膨らませ困った顔をするルナ。

「そんで……………トシが『心配だから俺もしばらく付きあう』とか言うてなー」

「近藤さんだって心配だから俺も、とか言ってたろ」

「か弱い女の子と狼男が一緒にいたらルナが喰われちゃうんじゃないかと思っよ！」

土方を狼に例えて豪快に笑う近藤。

「で…その後、そーちゃんも一緒にいくって言ってさ！」

「当たり前でさあ。狼男にゴリラの野生コンビと一緒に住むなんて可愛そうだと思っよ！」

「結局、全員でしばらく道場に居候したんだよな」

「そーちゃんが行くなら、ってミツバさんも来て…楽しかったなあ」

その時のことを思い浮かべてクスクスと笑う。

一方で三人は、ルナに合わせて笑いながらもドキリとしていた。

だが、合わせながらの不自然な笑い方にルナが勘づいたのか急に真剣な顔になり、三人を見つめた。

みんな、私に気を使っよ…

長年の付き合いでの勘だった。少しの異変もすぐに気付く。

ルナは今しか聞くときはないと思った。

「あの…また聞くようで悪いんですけど…」

改まったルナの言い方に三人は覚悟する。

聞かなきゃ…聞かなきゃ…！

ずっと聞こうと思っていたことを言葉にして話すのはとても勇気がいる、改めてそう感じながら決意した。

「ミツバさんは、今 ……どうしてるんですか？」

真っ直ぐな瞳。沖田はそんなルナの目を見て悲しくなった。

ルナも決意して聞いてきたのだ。わざわざここまで来た。松平の思いも無駄に出来ない。

また、答えないわけにはいかない、とそう思った。

少し、近藤と土方を見た。二人とも沖田を静かに見ていた。

行け。総悟……

それに答えるように、沖田も頷いた。

「ルナ。よく聞いてくださいエ」

真剣な瞳で見つめられて、心臓の音がドクンと鳴る。

沖田は、悲しそうな目で、優しく、ルナに告げた。

「姉上は……もう、いないんですか」

「……」

予想もしていなかった答えに声が震える。

そんなルナを見て悲しそうに俯く沖田の代わりに近藤が口を開いた。

「ミツバ殿は……病弱だっただろう。それが悪化したんだ」

目を閉じながら悲しそうにしたが、ルナのためにゆっくりと告げる。ルナは両手で顔を覆いしゃがみこんだ。

大好きだったミツバさんがもういない？

本当の姉のように慕っていたミツバが亡くなったと聞いた途端、悲しみが込み上げてきた。

「そんな……ミツバさんが……」

信じられない、という目で土方の方を見たが、土方は目を閉じていた。

本当なんだ ……

「私はっ…私はっ………」

途切れ途切れに泣き声が聞こえた。

沖田はそんなルナに励ましの言葉をかけようとしたが「自分が励まそうとしたところでルナは泣きやむだろうか」という心配が頭をよぎり、言葉を飲みこんだ。

ルナはゆっくりと顔をあげながら言った。

「私…ね。鬼兵隊で暗殺部隊ってのをやってたの…総帥の言われた通りに人を斬っていくの」

三人は初めて鬼兵隊での話を告白したルナに驚きつつも黙って話を聞いた。

「そんな無情な私についての通り名はね、『碧眼の悪魔』 ……」

つい以前、聞いたばかりの名によく耳を傾ける土方。

やはり、碧眼の悪魔はルナだったか…

「『碧眼の悪魔』は暗殺部隊。真選組の耳に入ることには無かったと



思っ」

「ルナ……」

自分のしていたことを一つずつ話していく。

「私は……ミツバさんがもう亡くなっているなんて知らずに……人を斬ってたっていうの!？」

目に涙を浮かべながら途切れ途切れに話すルナを黙って見る三人。

「ミツバさんに会えたかもしれないのに!大切な人が苦しんでいる時に私はっ……!」

「……」

「……最低……!!!!」

「違いまさア!」

大切な人が亡くなったのに、それも知らず他の者の命を奪っていた。

自分を責めるルナの言葉を沖田は遮った。普段ここまで大声を張り上げないため、驚き顔を上げる。

「これっ……………!!」

沖田は懐からピンク色の小花が散った可愛らしい便箋びんせんを取り出した。そのままルナに突き出す。

ルナはその便箋を受け取った。

表にも裏にも何も書いていなかったが、便箋の柄から女性からの手紙だということが大体分かった。

「姉上から……るーちゃんに」

「……………!!」

涙で濡れた頬を手で擦り、一つ、深呼吸をする。

そしてルナは、その手紙をゆっくりと読んだ。



## 第二話 私と武州と……（後書き）

2011年…もう終わってしまいますね…

連載を初めて、とうとう感想が10件に到達いたしました！  
お気に入り登録は5件に……！！！！

本当に読者の皆さまに感謝感謝でございます。

引き続き来年も、この小説と李の方をよろしく願います！！

### 第三話 私と道場と小さな背中（前書き）

あけましておめでとございます（\*^|^\*） 遅い……ごめん  
なさい<>

おみくじを引いたら末吉が出た李です……（笑）何故、末吉！？

2012年初の「私と」は、大分長くなっております……；  
今回より過去回想に入りますのでよろしく願います……！！

今年が皆さまにとって良い年でありますように！

### 第三話 私と道場と小さな背中

それは、幼い一人の少女が三人の男に拾われたことから始まり、少女が心を開いていくまでの物語。

枝垂れ桜の下で倒れていたところを近藤、土方、沖田に拾われたルナは三人の通う道場に行かせてもらうことになったのだった。

「今日からみんなと一緒に剣を学ぶルナちゃんです！」

「よろしく」

最初のあいさつは素っ気なかった。

入ってきたのは肩に少しかかるくらいの栗色の髪を下ろしていて、澄んだ瑠璃色の瞳がよく目立つ美少女。

だが、感情が読みとりにくいというか、何というか。周りには不思議な印象を与えた。

まだこの頃は三人にすら警戒心を抱いたし、必要以上には人と話さ

なかったためか、いつの間にか周りからも近寄りがたい存在になってしまっていた。

だが、ただ一人、そんなルナに毎日毎日話しかける少年と男がいた。

「るーちゃん！一緒に昼食べようよ」

「うん……」

道場での稽古が終わった途端、駆け寄ってきてにっこりと笑顔で話しかけてくる。

いつもこの調子で話しかけてきたため、その優しさを断ることができず、ルナの返事はいつも同じ。

「近藤さんも一緒に食べよう！」

「おう！じゃ、トシも呼んでくるな！先にいつもの公園に行つてくれ」

少年は隣にいる男　近藤に話しかけたが、近藤が「トシ」を探しに行き姿が見えなくなった途端、不機嫌な顔になった。

「近藤さん、野郎が来てからトシトシってちつとも僕のこと見てくれない……」

トシ　　土方のことである。

寂しそうな沖田を見ながら、二人は公園に向かった。

「近藤さん、遅いなあ」

少年　　沖田は、下を向いて近くの石を一つ蹴った。

その石は、近くにいた輪を作って話していた少年たちの方に飛んで行った。

それだけならよかったのだが石は、その中の一人の少年の足に当たってしまったのだ。

「痛っ」

少年は声を上げて、石の飛んできたこちらを向いてギロリと睨んだ。

「あ……」

しまった、と顔が青ざめる沖田。ルナもその様子を見て声を上げそうになった。

石が当たった少年は、周りの少年たちに何かを囁き、やがてその少年たちはそのままこちらに向かってきた。



「オイ！今俺様に石を当てたのはどいつだ！？」

少年は沖田が「蹴った」を見ていなかったため、石の飛んできた方を見て石を蹴った犯人を探す。

少年は子どもたちの中でもリーダーのような存在だった。

沖田やルナはその少年がリーダーだということは知らなかったが、少年たちのグループの中心にいたことからすぐに分かった。

周りで遊んでいた子どもたちは、その少年を知っていたのか皆譁々と震え、ぶんぶんと首を振っている。

そんな中で少年は涼しい顔をしてこちらを見ている自分よりはるかに小さい少年と少女を見つけ、その二人に声をかけた。

「お前か？」

沖田の方を見る。

「そうだけど」

沖田は、涼しい顔のまま素直に答えた。

「この俺様に石を当てるとはいい度胸だな」

「わざとじゃない」

「何か言うことあるんじゃないか？」

「ない」

謝ろうとしない。

心のこもらない言い方で平然と返す沖田に、少年は怒りが限界に達した。

「お前！生意気だぞっ！」

拳を震わせているがこちらはまったく動じない。

少年が次の言葉を発しようとした瞬間だった。急に少年は沖田の腰に木刀が差してあることを見て、勝ち誇ったように笑ったのだ。

「……何だよ」

「ハハハッ！お前あの芋道場の奴か！」

「……………！」

少年の言葉にはルナも反応した。

「あんな小さい道場なんてなくなっちまえばいいんだ！」

伝統のある古い道場だったため、柱の造りが弱くなってしまっていたし、人数も多いとは言えない。

村の者たちからは「芋道場」などと呼ばれあまり評判はよくない。

だが、道場に通うものにとってはそんなこと気にしなかった。

道場に通う者は明るくて、皆家族のような温かさを持っている。

近藤も土方も沖田もそんな道場を好いて、通っていた。

沖田は今までずっと少年の言葉を気にしなかったが、初めてこの少年に対して怒りを覚えた。

「芋道場なんかじゃないっ！」

急に大声を出したため、少年は少しのけ反ったが相手は自分よりも小さい。

怯まず言い争いを続ける。

「あの道場にいるヤツなんてそんなに強くないし、この前来たっていう一匹オオカミも騒動起こしたんだろ！いい迷惑だぜ！」

「馬鹿にするな！」

「……………」

自分より数倍大きい少年たちに立ち向かっていく沖田。

ルナは黙ってその小さな背中を見つめていた。

道場………

今まで道場で木刀を振るのは好きだったが、道場自体が好きだなんて考えたこともなかった。

目の前の沖田は、大好きな道場を馬鹿にされて怒っている。

その小さな背中には近藤が土方の話しをして悲しそうな顔をしている寂しそうな背中とは違った。

その小さな背中に何をそんなに必死に背負っているの…

…？

「こら！やめないか！」

そんなことを考えていたが、急に誰かから大声を出されて後ろを振り向く。

「……近藤さんっ！」

そこにいたのは、公園の入り口をドンと塞ぐ近藤と土方であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9992x/>

---

銀魂 - 私と桜と真選組！ -

2012年1月6日22時46分発行